

身 辺 雑 記

- 満州の終戦前後 -

復刻版

「いれぎゅらーぐらふ」

平成17年8月 第107号付録

昭和80年（終戦60周年）

序文目次

野邊游吉さんの「身辺雑記」復刻版発行に際し・・・・・・・・序 1

本誌発行の経緯・・・・・・・・序 3

大陸への進出「日本ビクター株式会社五十年史」より

東京・大連営業所新設・・・・・・・・序 4

満洲蓄音器株式会社設立・・・・・・・・序 5

野邊游吉さんの「身边雑記」復刻版発行に際し

と言うことで、敬友前北勝司さんから、「何かを・・・」と言われ、地球が引つ繰り返る程まごまごしたが、今は落ち着いた。

実は、私は別の人の件で、書棚の奥深く、ホコリにまみれた「身边雑記」を宝探しに似た気持ちで探し、引き出し、読みました。

そしてサメザメ泣きました。年は九十歳。今までの記憶では、野邊さんの本で泣いたことはありません。只、好きでたまらない人でした。

私はこの本を前北さんに会う時に持参いたしました。

かくして此の小冊子は前北さんのご高配に恵まれて「いれぎゅうらーぐらふ」の付録として皆様に見られることになりました。

たった四人で零下三十度Cのシベリヤに十五歳の長男を探しに行く。何度見ても考えても出来ないことです。元気な頃野邊さんは言いました。

河越君！「私は出来たからやった迄だ」「心の問題だ！」

前北さんもこの姿勢は続けて欲しい。ただ健康には充分気をつけて、「いれぎゅうらーぐらふ」読者の皆さん、前北さんと共に力強く進んでください。

世はIT時代、私は前北先生と古い因果のあることを全然知りませんでした。

何で数にも入らない河越に対し、こんなに親切にしてくれるのか、私はサービス時代の古き好き友を思い出しましたが答えが出ませんでした余り親切をして自分の寿命を縮めることのない様にして下さい。

それにしても「いれぎゅうらーぐらふ」の付録とはひいきの引き倒しになりませんか。

野辺さんのもう一冊「ビクターの創業者ベンガードナーを偲ぶー若き日の私の放浪記」を身勝手乍らビクター寿会の大会に関連して社長から関係者に配布することを藤原秘書室長と打ち合わせしたことを思い出しました。

アレもコレも、涙か笑いか判からないが、人世の役立ちには成る筈、リーダーシップを取るひとには特に肝要。

「ご健勝と共に」「いれぎゅうらーぐらふ」読者の皆さんのご多幸を祈ります。

河越信義

本誌発行経緯

河越信義先輩とは寿会コンピュータ研修依頼親しくお付き合いさせていただいておりますのは本「いれぎゅらーぐらふ」でも何回か記事にしております。先般、新子安でお会いしたときに彼は文章も上手なのでと野邊游吉さんの身辺雑記を見せていただき、そのまま貸してくださいました。戦前を少しでも経験している小生として、親父世代の経験話に興味を持ったのと、日本ビクターとして知らなかった部分が見えるのと、何部配布されたか分かりませんが、しっかり活版印刷され自出版している興味、最近の複写技術を試して見たかったので、今回本紙「いれぎゅらーぐらふ」の付録と思い立ち作成いたしました。

序 3

まず、読ん de e i i ココ (ver. 1.1) を使い、自動テキスト作成機能により一日仕事、それをページメーカーで編集に一日、校正に七日と原稿は完成した。OCRの識字機能がよくなっていますが、似た文字を当てはめてくれるのでつい見逃します。難しい単語なども多く時間がかかった。

製本は無線とじをやってみたかったので、夏休みの宿題気分で五十部製作しました。

河越先輩から過分なる序文を頂き、恐縮すると同時に、感謝感激です。有難うございました。

平成十七年八月吉日

いれぎゅらーぐらふ編集長 前北勝司

大陸への進出「日本ビクター株式会社五十年史」より

東京・大連営業所新設 昭和十三年、東芝が経営権を握ると同時に、日本ビクターの大陸進出が始まった。

もともと大陸市場の開拓は東芝の遠大な計画の一つであった。というのは当時、日本軍による大陸進攻がすすむにしたがつて、中国、満洲では日本商品の需要が急激にふえつつあった。しかし、電波機器の分野においては、RCAとフィリップスの独壇場で、わが国からは満洲電電公社を通じてビクターのスーパーラジオがわずかに進出しているにすぎなかった。当時、スーパーラジオの技術がビクターにしかなかったからである。そこで、東芝はRCAとフィリップスの勢力に対抗して大陸に進出するには、ビクターの技術を利用する以外にないと考えていたのである。

昭和十三年五月、新任の伊東専務は、まず、満洲、北支の市場を視察、帰国後の六月一日、これまで満洲・大連の売捌元であった山菜洋行との契約を解除し、新たに大連営業所を設置、大陸開拓の布陣を敷いた。つづいて、同年十月には従来、文芸部内においていた東京販売部を解消して、別に東京営業所を新設した。これまた、大陸市場をにらんだうえでの布石の一つであった。

生産面でも、従来はレコードが主力であったが、東芝の傘下に入ってから、資材の入手難からラジオにウエイトがかけられるようになった。

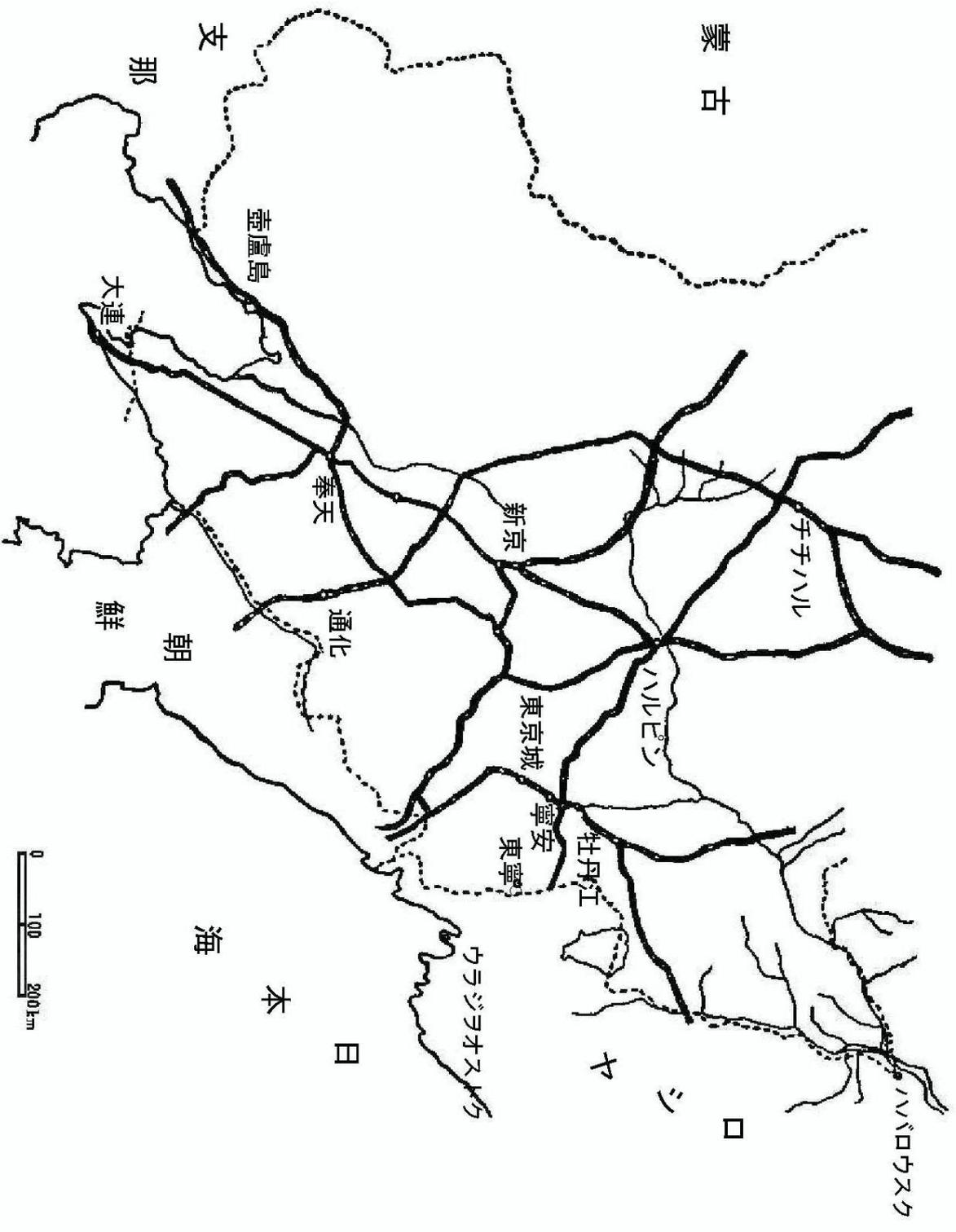
満洲蓄音器株式会社設立 そのころ、満洲、北支で商圈を築いていたのはRCAであった。そこで、いかにわが国がこの地域での権益を拡大しつつあったとはいえ、レコード、蓄音器、ラジオの事業をすすめるにあたっては、その販売をめぐって、RCAとの間になんらかの妥協点を見出さなければならなかった。交渉は再三再四重ねられ、結局、最終的な妥協策として、日本ビクターとRCAの合弁会社を満洲国新京と上海にそれぞれ設立することになった。また、同時に資本の構成を日本側が五十一%、RCA四十九%とすることと、新京の会社は、日本が設備の新設、経営にあたり、上海の会社はRCA主体の経営で、日本側はこれに参画することの二つの取決めが成立した。かくして、昭和十四年五月、満洲蓄音器株式会社（本社・新京）と中天勝利唱機股份有限公司（本社・上海）と、二つのビクター系の会社が設立された。新京の新設会社、満洲蓄音器（満蓄）においては、業務、製造、技術面の専門家は日本ビクターから派遣されることになり、また当初、代表者は東芝から選任されて運営にあたった。しかし、こうした陣容での経営はなかなか順調に進展せず、昭和十六年七月には日本ビクターから野邊游吉が代表責任者として派遣された。



身 辺 雑 記

――満州の終戦前後――

滿州の一部



忘却は人生唯一の救いであるという。

戦後二十年もの今、敗戦当時の惨めな憶出など語るのは、野暮もまた甚しい。

お互に忘れきっていたことを喚び起すおろかさ、笑われるに違いない。だが、惨めな当時が時折り、新鮮な生々しさで心に浮んで来ることがある。今にしては、それが魂の悦びともなりつつある。

一個の私事にわたる憶出にすぎないが湧き出る流れを無理にせき止めておくのもどうかと思つて、独り言をメモ書にしてみたに過ぎない。

人々の生涯には、それぞれ、ヤマ場が一度や二度はあるものだという。人によってはそのヤマ場で、輝しい栄光を青史に残す者もあれば、また巨富を得る者もある。哲人は想の深奥を極め、詩人の魂が燃えさかる時不朽の作を残す。

私は、巷間の一庶民にすぎないが、私の生涯にも、また、それなりに、ヤマ場らしきものがあつた。それは、敗戦当時の奈落にして、かち得た人間形成のヤマ場であつた。

この身边雑記は、その独り言である。

昭和四十年五月

目次

まえがき

終戦前

吉川英治、川合玉堂と吉岡中将	四
特攻隊の唄と吉岡中将	五
関東軍最高軍司令官山田大将のレコード吹込	八
満州蓄音器株式会社の生立ちと私の渡満	一一
満州映画株式会社との提携経緯	一九
甘糟正彦氏の憶出その他	二三
ソ連宣戦布告とその侵攻の前後	二五

終戦後

陛下の御召勅放送と敗戦の新京	三四
----------------	----

甘糟満映理事長の自決・・・・・・・・・・三八

ソ連兵の自宅闖入・・・・・・・・・・四〇

ソ連軍入城後の新京・・・・・・・・・・四三

新京一中学徒救出隊の隊長となる・・・・・・・・四六

新京―ハルピン―牡丹江―寧安―東京城への北満潜行・・・・・・・・四九

ソ連將兵帰還列車便乗の一夜・・・・・・・・五二

満軍に逮捕され牡丹江留置場に入る・・・・・・・・五五

寧安日本難民収容所に泊す・・・・・・・・五七

東京城日本難民収容所の惨状・・・・・・・・五九

東京城よりの脱出行・・・・・・・・六三

引揚列車日本婦女子へのソ連兵の夜襲・・・・・・・・六五

ソ連軍に協力満州復興画策のこと・・・・・・・・六七

―高碇達之助氏を中心として―

逃亡四ヶ月半、ソ連軍の逮捕を逃る・・・・・・・・六八

ソ連軍撤収と八路軍の侵攻・・・・・・・・六九

八路軍と満州軍の攻防戦・・・・・・・・・・七十
八路軍政下の新京・・・・・・・・・・七三
蒋介石軍の入城と八路軍の総退却・・・・・・・・七五

内地引揚

内地への引揚・・・・・・・・・・七八
長男一郎の死・・・・・・・・・・七九

身 辺 雑 記

――満州の終戦前後――

終
戰
前

吉川英治、川合玉堂と吉岡中将

偉容を誇った関東軍々司令部の正面玄関をはいつて、右へ曲る大廊下の奥深い右手に、満州国康徳皇帝の、待従武官長として、お守り役をつとめていた吉岡安直中将の一室があった。

昭和二十年三月初めのある日、軍司令部をたづねた序でに、吉岡中将の部室を叩いてみると、折よく在室で、私の不意の訪問を、非常によろこんで貰った。

満州新京の三月初めといえば、まだ零下二〇度の寒さで、万物は凍りついている時季である。一般の民家は、燃料不足のため、思うように暖もとれない戦争末期ではあったが、軍司令部内は暖房が行き届いて、まったく春暖の如く、閣下の部屋には、内地の春を思わしめる桜草が、ピンク色に咲き誇っているのが、きわめて印象的であった。

「やあ、丁度いい時に来たね、ひとつ、よいものを、君にお目につけよう」といいながら、封を切つて間もない一通の書翰を、さらさらと開いて、私に見せてくれた。それは、長さ六尺ばかりの、墨痕ゆたかに認められた長文の手紙で、川合玉堂と吉川英治の寄書である。書き出しは玉堂が認め、中ほどに玉堂が美事な蘭を描き、それに吉川英治が俳句をものし、そのあとに吉川の

長文がつづくものであった。両氏の文意は、何れも吉岡中将の高潔な人格と護国奉公の誠を賛えるもので、蘭は、その精にふさわしい気高さを示すものであった。

吉岡さんは、いかにも満足したように、「なかなかよいものだろう」と、私に再三得意そうに自慢していた。

玉堂、吉川両氏は、それ迄、吉岡中将とは一面識もなかったらしいが、当時、満州国皇帝のお守り役として令名が高く、かつ、高潔の士として謳われていた人物でもあったので、その人格を遙かに慕つての書翰であつたと思う。すでに故人になつた両巨匠は、その頃奥多摩に疎開しての隣組同志でもあつたので、渋茶をすゝりながらの徒然の話し合による心のこもつた手紙であつたに相違ない。

特攻隊の唄と吉岡中将

前

吉岡中将についての、ほゞえましい追憶として、こうした事もあつた。それは昭和十九年の晩秋の頃である。吉岡さんから電話があつて、「唐突なお願いだが、わしの唄をレコードに吹込ませてくださいぬか」とのことだつた。中将が一体どんな歌を、そして何のために吹込みたいのかと訝

りながら、関東軍々司令部に吉岡さんを尋ねてみると、経緯はこうである。

さきに満州国宮廷で、夜宴が開られた際、吉岡さんが微醺か、酔ってかはしらないが、兎に角、皇帝の御前で、『男なら男なら……』の特攻隊の歌をうたったものである。それが、皇帝のお気にいたく召して、是非ともレコードにして献上しろ、とのことなので、自信はないが、中将自ら吹込みたいとのことである。だが折角レコードにするからには、後日に残ることだし、少しは練習もつんだうえで、本番をやりたいがどうだ、とのことだった。その後、吉岡さんはお嬢さんのピアノの伴奏で、練習にはげまれたようである。

翌年新年の挨拶に行くと、大分自信もついたから、二月十一日の紀元節祝日に吹込みたいとのこと、当日は早朝宮廷に参賀、式典を終えての帰途、副官帯同で私の満州蓄音器株式会社に立寄り、愈々吹込室での本番吹込みとなった。

千軍万馬の將軍も、手なれぬ唄の吹込みとなると、少々堅くなって、二、三回吹込み直しをしたかのようである。「唄は、軍の号令みたいに容易ではないわい」と大笑する閣下を送り出してから、一週間後にはレコードは美事に出来上った。私は、その夜レコードを持って、吉岡官邸を訪ねた。私のために、葱鮪の鍋料理と、芳醇な内地の灘酒が用意されていた。当時としては、全く予期しない、大した歓待である。

吉岡さんは安月給の大尉時代に購めたという旧式のポータブル蓄音器を、押入れから取出して来て、出来上ったばかりのレコードをかけ、二人で鍋料理をつゝきながら、盃をかさねつゝ唄を聴いた。出来ばえは存外に立派で、吉岡さんも非常なご満悦、二人とも酔うほどに「男なら男なら……」を共に感激しながら合唱した。吉岡さんは、その素晴らしい感激の醒めやらぬうちに、参内し、「臣吉岡の唄」として、レコードを皇帝陛下に献上したい、と云い出して、早速軍服に着替えて参内された。私は灘の生一本を貰って、閣下の参内の車に便乗して帰宅した。その翌朝、電話があつて「陛下が大変なお悦びで、おかげで吉岡面目をほどこしたよ」との礼言であつた。ガタガタの安ポータブルに、レコードをかけて唄う將軍には、全く無欲至誠、しかも竹を割つたような天真の人柄が躍如としていた。

画聖玉堂も、文豪吉川英治もすでに故人、そして、その巨匠としての名は、いよいよ不朽にちかい光芒を加えつゝある。

前
黄竜旗のもとに、清朝最後の宣統帝、そして後の康德満州皇帝は、いま人民服の一庶民溥儀と戦して、中国近代史の研究者となり、毎日をバスに揺られて通う一サラリーマンであるとも伝えられる。

吉岡中将の最後については、伝える者もなく、遙として不明、氏を知る人達も、あえて語るをさげがちな、世相の皮肉さを見るにつけ、歴史の流れとはいえ、成敗のためとはいえ、私の感傷は、何か割りきれないものを感じるのである。

関東軍最高軍司令官山田大将とレコード吹込

吉岡中将のレコードが出来あがって後、一、三週間程もしてから、関東軍最高軍司令官山田乙三大将の副官から、私へ突然電話がかゝった。

「軍司令官が、お願いしたいことがあると云われるので、一寸司令部まで、ご足労ねがえぬか」とのことである。

当時、関東軍々々司令官と云えば、全く雲上の如きもので、一般民間の、ごときは、側にも寄れないことは勿論、遠く拝することもめつたにない帝国軍国主義の権化として、まことに権威高いものであった。その最高軍司令官から依頼の次第があるというので、私はドキッとした。早速、司令部へ車をとばして副官室をたづねた。

「先般吉岡閣下がレコードに吹込まれたそうだが、今度は山田軍司令官が吹込みを頼みたいと

云っておられるので、どうだろう」とのことである。まさか軍司令官が、唄でもあるまいと思いい、何を吹込まれますかと質すと「全満の将兵に対する訓辞」であるとのことであった。私はこれを心よく引受けて帰った。

戦前、戦時中、満州には、大陸の諸重要企業の主軸機能を掌握し、運営に当たっている特殊法人として、満鉄をはじめ有力な諸事業会社があり、関東軍活動と緊密な連絡をとって大陸経営に当たっていたが、かゝる有力会社にさえも、最高軍司令官が訪問するがときは、殆んど皆無といってもよいくらいのことだった。それなのに、自から足を運んでレコードの吹込をされるといふことは、私の会社にとって、まことに誇り高いことであると思った。

愈々吹込みの当日は、関東軍報導部長長谷川大佐と副官を帯同して、まったくのお忍びの来訪である。吹込の諸設備はよく調整されていたので、吹込は至極順調に進んだが、訓辞をレコードにするには時間的に少し長が過ぎたので、辞文を少々削除して貰って、吹込みを完了したことを記憶する。この訓辞の原稿は、もちろん大将自から稿されたものであり、辞文の一都削除も、自前から鉛筆をとって即座に削除して吹込れたが、やはり軍の将兵を直接前にしての訓辞とちがひ、戦前、戦時中、満州には、大陸の諸重要企業の主軸機能を掌握し、運営に当たっている特殊法人として、満鉄をはじめ有力な諸事業会社があり、関東軍活動と緊密な連絡をとって大陸経営に当たっていたが、かゝる有力会社にさえも、最高軍司令官が訪問するがときは、殆んど皆無といってもよいくらいのことだった。それなのに、自から足を運んでレコードの吹込をされるといふことは、私の会社にとって、まことに誇り高いことであると思った。

終 端然厳肅を極め、小柄な体軀にも似ず、軍で鍛えあげた音声は朗々として立派なものだった。

このレコードの製作は、迅速しかも慎重を期して、二週間後には軍所用の必要枚数を司令部に納入した。のち副官から電話で、軍司令官が非常に満足されて、お礼を申したいとのことだから、来てくれとのことだった。私は早速司令部副官を訪ねたが、山田大将が軍司令官室で、自からお礼の挨拶をしたいとのことだという。私は光栄に思っ、副官案内で単身、軍司令官室に入った。

室は二階中央の堂々たる部屋で、入口から素直ぐに歩くと、真正面に両陛下の御真影が掲げあり、その掲額に最敬礼した後、右へ向いて進むと、正面の大テーブルに小柄で色黒な山田軍司令官閣下が、直立して私を迎えて呉れた。「非常に御手数な煩して、恐縮でした。訓辞は全部、全満の将兵に配布をした。については御礼をしたいと思うが、如何したものか、腹蔵なく言っしてほしい」とのことだった。

山田大将は、『軍の三筆』の一人として書道の達人であることを、かねて仄聞していたので、閣下に、書をかいてほしいと所望した。ところが、「では、何と云う語句を書くか」との問返しに、ちよつと、ためらったが、長谷川大佐の室に掲げてある色紙の書を咄嗟に思出して、私の事務所の社長室に掲げ得るよう横書の大書にして『志存即克』と願いたいと忖じて辞去した。

それから一週間経て、閣下の大書を丁寧に、副官が私に届けてくれた。

しかし、戦況は、時既に非、表面駘蕩のごとく見えた満州には、数ヶ月後の敗戦の大崩壊がじりじりと忍び寄っていた。だが当時なお偉容廠として、北の護りに当っていた関東軍の最高軍司令官室での憶出も、今にしてみれば、別に語るにたるほどのことでもなくなつたが、当時としては、民間のほとんどが窺い知ることの出来ない、廠たる密室であつただけに、記しておきたい憶出である。

満州蓄音器株式会社の生立ちと私の渡満

今にしては一時的仮設国家にすぎなかつた満州国は、建国以来急速に伸張していった。それと共に、北支、中支への日本の権益も進展しつゞけた。かゝる実勢下にあつて、文化事業の重要な一環たるレコード、蓄音器、ラジオの事業は、日本ビクター株式会社と、米国のRCA（ラジオ・コーポレーション・オブ・アメリカ）との相互契約によつて、大陸での日本製品製造販売は、日本の租借地、即ち関東州地域に限るとのことになつていた。ために、満州全土はもちろん、支那大陸には日本製品の販売は、許容されない事情にあつた。で、RCAは上海に製造工場を設け、終天津、大連にその営業の拠点をもつていた。

然るに日本の權益が、どんどん支那大陸に進出し、満州国が日本の支配下に、その基礎をかためつつある実情よりして、日本製品も満州国内、及び支那大陸にその販路をどしどし拡大して行くことは、やむを得ない実勢といわねばならない。ために、日本製品とRCA製品が、大陸にあって、相互に、角逐競合するの情勢にたちいたった。

そこで日本ビクターは、RCAに対して、せめて満州国内だけでも、日本ビクターに販売をまかせて、手を引くように再三再四交渉したが、先方は頑として応じないまゝに推移していた。結局、最終的妥協案として、日本ビクターとRCAとの合弁会社を満州新京と上海に夫々設立し、日本側が五一%、RCAが四九%をもって、新京在の満州蓄音器株式会社（以下満蓄と略称）は日本側がその設備、経営に当り、上海は日本側も経営には参劃するが、その経営の主体はRCA側という取極めが成立したのが、昭和十三年のことである。

そこで、日本ビクターは、即時新京に工場建設を行ない、現地で製造万端が出来るよう段取を整え、上海はRCAの既設工場を使用することにして、この南北の姉妹会社は、新しい飛躍段階に達して、大陸文化開発に大きく乗出すことになった。

当時日本ビクターは東芝の資本系列下にあつたので、新京の新設会社には、業務、製造、技術面の専門家を日本ビクターから主として派遣し、その主裁者たる代表者は、東芝から選任されて

運営に当った。だが創業当初のことであつて、経営はなかなか順調に進捗せず、企業の大成は、期待すべくもない状態になつた。

そこで、日本ビクターはRCAとも相談して昭和十六年七月、その企業の主裁者とし、私を代表責任者として、経営の一切を、委嘱することになつた。

それまで、満州や、支那大陸は、私にとって全く未知の地であり、しかも四囲の国際情勢は、益々窒息しそうな逼迫時であり、満州国の仮設もはたして、本物として成功するや如何も、多少の不安なしとしない時期でもあつた。日本ビクターの創業以来、私の協力者として働き、また部下として同じ釜のめしを喰つて辛苦を共にして来た同志の人々は、私の渡満を悼み、思い止まらせ、また会社へも強く進言せんとする動きを示してくれた。

しかし、私はこの新しい任務に、むしろ気魄を感じた、希望と夢をもつた。それは、自己の抱負を、他の掣肘を受けないで存分に伸ばして見たいこと、大陸の未知の社会の文化工作に多分の夢を感じたこと、それに、私には、当時、一郎、二郎の男の子がいたが、この二人を馬糞臭い大陸の異民族の中で厳寒頭骨も凍る大原野で、強く、蓬しく育て、見たいとの願いからであつた。戦それで同志達の友情による渡満阻止を拒んで、早速満州の視察にのぼつた。新京の大和ホテルに終宿して、約一ヶ月半、満蓄会社の実勢や、将来の見透しについて調査研究した。ところが会社の

実態は、市場の需要は旺盛でも会社自体の内部事情として、レコード製造の原料、諸資材の手持ちが潤沢でないうえに、満人工の意欲と能率が甚しく悪いことである。そのまゝで行けば、一年たらずで原料を使い果たしてしまつて、お手あげ閉鎖となるまことに心細い情勢であつた。

そうかといつて、当時のレコードの原料たるシエラックや、コーパル、ガムは遙か南方の仏印、ボルネオ方面から輸入せねばならぬ難物であり、内地の親会社の手持ちを割愛してくれる余裕も全然ない。おまけに、輸入材については、為替関係を満州国政府が極力引締めている関係で、愈々もつて難問題であつた。事実、その時、期待を完全に裏切られたような思いをしたが、一旦引受けたからには、引きさがる訳にはいかない。やるだけやらねはならぬ。

視察を了えての帰国後、早速家を引払つて、家族を帯同渡満した。ところが、新京に着任して、一週間後に太平洋戦争の宣戦布告となり、真珠湾攻撃となつた。

基幹産業的事業とは異り、レコード、蓄音器、ラジオのごとき文化面の企業は、開戦によつて益々顧慮されない部門となり、その資材の入手はいよいよ困難になつた。殊に当時の満州国は、軍部の要請により移駐した鮎川さんの満州重工業でさえも、岩盤にぶつつかるように手を焼いた巨大な特殊企業会社が、それぞれの事業分野に盤踞して、日本から来た急ごしらえの企業体のごときは、その翼を伸ばすのに、なかなかの大変であつた。

そこで私は、このレコードの企業を、満州国政府、関東軍にはもちろん、是等特殊事業会社の主脳部達に対しても、極力PRして、大陸民族の宣撫と、民生安定のための無二の文化材として、必要不可欠のものであることを認識して貰い、その資材獲得のために協力をして貰うことだと思った。八紘一宇などといったの抽象的な精神運動だけでは、民衆はついて来るものでは決してない。やはり慰めや、よろこびを与え、満州の五族、手をとり合って唄い、宥和一団となることだ。それには、映画もあるが、レコードがもつともっと早い。歌い、踊り、楽しむことは、いずれの民族をとわず、人間の本能に根ざしているものである。

当時満州には新京が中心になって、奉天、ハルピン、大連にロータリー倶楽部が存続し、特殊会社の主脳者達や、政府要人の一部、それに日本からの有力な出先機関が、殆んど、その会員になっていた。さらに満州中央銀行倶楽部に、主たる金融機関の主班と有力会社の主脳者達をもつて組織された金曜会なるものがあつた。この二つの倶楽部は満州の大方の有力者を網羅していたので、私は、先づこの二つの倶楽部に入会した。そして入会に当って自己紹介と、担当する企業前の紹介に、レコード文化不可欠の効用を、大胆率直に述べて各員の印象を先づ深めた。

戦 中銀倶楽部の金曜会の席上、再三講演したり、日本の戦況を見て帰っては、その報告会もした。この事は、私自身を売込むためではなく、レコード企業の不可欠さを認識して貰うための存

念にほかならない。

斯くするうちに、漸次理解も増し、渡満後存外短時日の間に、事業上の有力な知友がふえた。

日常の製造、販売の内部的業務は、ほとんど一切を会社の本社及び工場の責任者に委して、私は資材の獲得、その他外部関係の全般に献身した。会社の幹部をはじめ、従業員一同は、全く一体になつて、私を支持し、それぞれ担当の責任を懸命に果してくれた。ために、少しの後顧の憂いもなく、ことに当り得たばかりでなく、私はつねに独裁独走でことを運ぶことが出来た。当時の協力者であつた八木沢（現日本ビクター常務）、山口（現日本ビクター取締役）、伊奈、飯野（戦死）、南部（戦死）、米沢（戦死）、四本、相馬、小島、今村、小池、田中、安川等の諸氏は各部門の担当責任者として一致して、全力を尽してくれた。なお北支にあつては袴谷（元ビクター監査役）、上海では黛（前ビクター常務）、上井（現ビクター取締役）の各氏が側面から協力してくれて、私は大陸に存分の活躍が出来た。そこで、先づ一番の難物はシェラックとコーパル、ガムを南方から輸入することであつた。それには政府経済部の為替許可と、関東軍経済参謀部の決裁とを仰がねばならないし、また、金融的に正金銀行の支援を必要とした。

もともと日米合併の会社たる満蓄には、政府経済部は、当初甚だ無理解で、非協力的であつたが、政府、関東軍経済参謀部に対しての私の説得が、漸く結実して、美事に輸入許可を得ること

に成功した。そこで三井物産と三菱商事両社の協力を俟て、船腹の少い困難な時に、遠く南方よりの輸入に成功した。

その時の許可輸入量で、満州、北支一带を主要区域として、約三ヶ年半分の材料を確保することが出来た。この新材料に、古レコードの回収材料を混入して製造することによって、約五年乃至五年半分の豊富な材料をストックすることが出来て、日本内地のレコード製造会社の、その時点に於ける手持総量を、遙かに上回るものであった。

金融的にも、資材上でも、日本内地からの援助を何一つ受けずとも、満蓄自体の力だけで、大陸のレコード文化工作を、独自で為し得る十分の態勢を準備したのである。

そこで、更らに一步を進めて、蓄針製造工場の増設、またハルピンにポータブル蓄音器製造工場を買収建設した。当時は鉄鋼、非鉄金属の使用は、直接の戦争用目的外は禁じられていたもので、満蓄使用の分野は、勿論非許可に限られていたが、私は、先づ関東軍経済参謀部へ強力に働きかけて、民生安定のための宣撫用と、満州、北支軍専用の一部として特別許可配給を受けることに成功した。

戦 レコードの吹込みは、新京と北京に吹込所を設け、適時現地吹込みをなし、日本ビクター所有の日本および欧米音楽の大部分の原盤を殆んど取寄せてをストックした。

かようにして、戦時下にあっても、全く万全の態勢を整え得た訳で、当時、私の得意や思つべしであつた。

一方、音の分野のラジオは、満州電々会社が、日本ビクターから高級品を輸入して全滿に配布していたが、戦局愈々熾烈なるにつれて、日本よりの輸入に依存することが不可能になつて来たので、満州電々会社が主になつて、新京に満州ラジオ製造株式会社を設立して自給自足する方策をたてた。そして、松下と東芝の協力のもとに、三者合併のラジオ会社が設立され、新会社の社長は松下幸之助氏が選任され、私は東芝系列側（日本ビクター、日本コロムビア・早川電機、山中等）を代表する取締役として選任され、経営に参画した。

かくしてラジオ企業は広瀬中将の総裁たる満州電々との協力系列となり、映画は特殊法人満州映画株式会社（以下満映とす）の甘糟理事長が主裁して、北支、中支までその事業を牛耳つていたばかりでなく、レコード企業以外の文化活動をもその傘下に収めていた。

さて、残こされたレコード、蓄音器関係の事業のみは、満州国政策の埒外に、放置されたままのような状態であつたが、前述の通り、非常事態下にあつての悪条件にもかかわらず、懸命の努力が結実して、満蓄は、一応万全の態勢を準え得て、自主独力でこの方面の文化政策に奉公なし得る意気を燃し、十分の自信を持った。業績も職員全員の努力精進によつて、利潤もどんどん殖

えて、安泰を極めて来た。内部的業務につき、私が敢て指図して改善した事績は、満人工の意欲と、その能率が極めて悪いので、満系職員の中で最も優秀な王君を製造工場の副工場長に抜擢登用して、満系職工に対しては、出来高払の請負制度にしたこと位であったが、この改革によって、製造能率が倍加した。他の内部業務は、八木沢君その他の幹部諸氏に一切を要して、私は、『満蓄』と云う船の進行方向の舵取りばかりに当った。

こうした、全員の協力で、私が渡満当初企画した目標の大半を、きわめて短期間のうちに達成し得た。しかし、戦況は、愈々熾烈さをまし、会社の日本人職員は幹部といわず社員といわず、応召する者が多くなり、日本内地との連絡も至極困難になりつつあった。

満州映画株式会社との提携経緯

前 満蓄は、全然内地との連絡が杜絶しても、五、六年間は大丈夫その使命を果し得る自信と、計算をちゃんともっていた。が、日本のコロムビア、キング、ポリドール、テイチク等の会社は、戦その製品を、満州、北支へ多少輸出版売はしていても、戦況の進むにつれ、その輸出は困難にならなくなって、先行き気の毒な状態になりつつあった。

丁度こうした情勢下の昭和十八年暮れ近い頃、関東軍報道部から、私に対して、満州を主体にして、満州、北支のレコード企業を一本に統制して、宣撫工作や、民生安定のために合理化することを考えて見てはとの相談があつたが、日本内地の各社の意見を纏めて、満蓄に一本化することは、時期尚早であり、なかなかの困難なことだと思つた。そして他社を一本に統合しなくとも、時期来らば自から満蓄だけで、十分奉公の実を挙げ得るにやぶさかでないと自負していた。この軍の勧誘と機をおなじくして、当時満映の理事をしていた根岸完一氏（故人）から、私に会見を申込んで来た。折入つて相談したいとのことだつた。

相談の要件は、満蓄が、満映と平行線上で、ちぐはぐに活動することは、お互に不利なことだしするので、是非共、私に甘糟満映理事長と、手を握つて呉れぬかとの申出だつた。根岸氏は病身で、身体の具合も悪いし、近々内地へ引揚ることになつていたので、私と甘糟正彦氏の握手を置土産にしたいとの折入つての願ひだつた。

それまで、私と甘糟氏とは、直接の交渉はあまりなかつたし、その人柄についても親しく知ることなかつた。ただ彼が大杉栄を関東大震災の時、殺したことで有名であり、憲兵出身で東条英機の流れをくむ人物であること、満州国建国には裏面の功労者であり、当時なお満州国政治の黒幕として、隠然たる勢力を持っている怪物的人物として、私の反骨精神は、むしろ反発的感さ

えも持っていたくらいであった。

ところで、根岸氏は浅草から身を起して、戦前の日活を育てあげ、後、渡満して、甘糟氏の下で、満映を立派なものにしあげた人だけに、なかなかの苦勞人で、私に対しての説得も辞をつくして丁重なものであった。

戦況の苛烈さがますますにつれ、日本との連絡も思うにまかせぬにつけ、満州は日本に依存せず、満州独自の日満融合の生み出す新しい文化を打建つべきであると、私は思うにいたった。こうした私の思想の推移もあって、さらに素裸になって満州国の懐に、一段と深く飛びこんで、徹底しきらねば駄目だと思つようになっていた丁度その矢先きでもあったので、一度甘糟氏に会つて見る気になった。

かくして、私と甘糟氏との会見となつたわけである。満映の理事長室で、甘糟、根岸両氏と私だけ、三人きりの初めての会談であつたが、甘糟氏は私に対し「根岸君から話はすでに聞かれたと思うが、一つ満映と協力して、満州国の文化開発に尽力して頂けないか、満映はもとよりのこと、関東軍、満州国政府も満蓄を支援して、文化工作の重大な一翼となるよう、この甘糟も極力戦尽力致したいが……、なお詳細については、根岸、林両理事と篤と相談をねがいたい」とのこと終だった。

甘糟氏はカーキ色の協和服に、黒い長靴をはいて、大きい椅子によつてはいても、少しも傲岸不遜なところもなく、至極礼節にとんだ物静かなサムライで、むしろ私は、よい印象をもった。「十分考慮した上で……」と云つて別れた。

その後、関東軍報道部長長谷川大佐を訪ねて、甘糟氏からの相談を伝え、意見を求めた。大佐は「戦況もいよいよ激しくなつて来たし、この際、満蓄は満映と協力して活動することがお互によいことだし、軍としても、その方向を極力支持しよう」との意見であつた。

そこで、私の腹もきまつたので、満映の根岸、林両理事と詳細の打合せに這入つた。話合の具體的条件は、軍、政府の支持を得て、満蓄を満州国の特殊法人とする、満蓄は、工場、設備、資材、人的組織の一切を提供し、運転資金充当のために増資し、その資金は満州国政府と満映が出資する。日本ビクター以外のコロムビア、キング、ポリドール、テイチクの各社とは、それぞれ折衝して、満州国内の営業活動から手を引いて貰い、その替り、各社の原盤を満蓄に提供を受けて、満蓄にて一手に製造販売する。その販売高に応じて各社へは印税を支払う。かくして、満州国内のレコード製造、販売を統制して満蓄一手に行う。レコード市場の販売価格は、相当額を引上げ、その利潤を倍加して、利益金の一部を文化工作と民生安定の助成資金の一部に流用する。

大体こうした筋書が出来上って、昭和十九年初め、私は満映理事の林氏と同道して渡日し、内地のレコード各社との折衝に当たった。資本系統の夫々異った内地の各社からの協力には、相当の波乱曲折があつて、『野辺旋風』との悪評を蒙つたりして容易ではなかつたが、日本コロムビアの武藤与市氏（元社長）が先づ賛意を表し、協力してくれたので、兎に角各社を折伏して、一本に統合して出発することになった。

甘糟正彦氏の憶出そのほか

満映との協力体制が出来上ってから、私は、甘糟氏と直接折衝し、相談する機会が多くなつた。軍に対しても、政府との交渉でも、私のために、よくその労を自からとつて呉れた。一部では黒幕的怪物として恐れられていた点もなかったが、会つて話せばもの静かで、判りがよく、存外に文化人的香りのする人物で、少しの粗暴さもない、礼節の正しい人だった。

前 大和ホテルや満映の湖西会館等での、会食の催しなどでは、散会にあたり必ずと云つてもよい戦 ほど、甘糟氏が中心になつて、皆んなで手をつなぎ合い、足を踏みならしつつ、輪をつくつて、「お終 手々つないで野道を行けば、みんな……」の童謡を唄い合つて、微醺もつて別れたものである。

当時いまだ可憐であつた李香蘭なども一諸に、度々こうした童謡の同志輪の仲間に加つていたものである。

ある日、私が甘糟氏と二人きりで、話合つていた時、声を落して「やつかない戦争を始めたものですね、大きい間違いをやりましたね」と撫然とつぶやいたのを憶い起す。私は彼の口から、そうしたつぶやきを、聞こうとは夢にも思はなかつただけに、急に肺腑をつきさされたように驚いた。

満映の俱樂部であつた湖西会館は広い芝庭にとりまかれた仏蘭西風の設計になる建物で、東洋的風趣のない立派な洋風で、これも甘糟氏の好みによるものだった。甘糟氏の関係する会合や、接待は大方この会館で催され、日本では上映禁上になつていた洋画等が特別に披露されたりもした。

当時、満映が中心になつて、費用も負担して組織育成した満州交響楽団等の理事会も、よくこの会館で催された。私もその理事の一人に選任されていたが、他の理事としては、満業総裁の高碕達之助氏、岡田満州興業銀行総裁、三浦関東州長官等がいたので、いつも顔をあわせる都合で、私の事業のためにも色々と便宣であつた。

私は、渡満後、魚が水を得たように、毎年五、六回は日、満間を往復し、また、中支、北支へ

も、しげしげと飛び廻って全く寧日がなかった。毎日毎日が命をはっての体当りの生活だった。文化面を通しての大陸開発建設に精進これつとめた。

お陰で支那大陸全般の様子も大体わかって来たし、また日本内地の変遷も、わかって居た。東京、横浜が蒙った大空襲や、濃尾を中心にした大地震にしても、内地滞在中に出くわしたので、帰満しては、中銀倶楽部やロータリーで、その模様を講演したりもした。

最後の日満の往復は、二十年四、五月の東京、横浜大爆撃の際で、現にその惨状をこの目で見た。既でに空便も、船も危険で、日本の最後も遠からじと察せらるる時だったが、敵潜艇の襲撃を避けて、新潟から、ジグザク航で、ようやく清津に上って、新京に辿りついて帰宅した。

長男一郎は、その時、新京中学の三年生になったばかりの十五才であったが、私の旅行中に、ソ連領が目の前に見える国境東寧の農場の麦の収穫に勤労奉公隊として動員され、リュック一つを背にして奉公の心を燃やして出掛けてしまった後だった。そして一郎からは収穫が少し遅れるので、帰宅も予定より遅くなりそうだと便りが届いていた。

ソ連宣戦布告とその侵攻の前後

昭和二十年八月九日未明、全く突如としてソ連軍が満州国境の堅い護りを、怒涛のごとく破つて侵入して来たとの急報がはいった。日満守備軍との熾烈な戦闘が、全国境に開始されつつあるとのことである。日ソ不可侵条約もあることだし、まさかと思っていた際でもあるので、それは全くの驚きであった。

この時から首都新京には、右往左往の騒ぎが起った。が、それでも、満州の守りはそうばかり、たやすく潰え去るとは思えなかった。

別に狼狽することもあるまいと思つて、会社も平常の通りに業務を運んだ。日本従業員の四十五才以下の者は、殆んど召集され、僅かに一、三の老年組が残るばかりであつたが、事務所も、工場も、満系職員、職工ともに、存外平気で仕事に当り、少しの支障もない平静さであつた。

その日の午後、私は平常の如く、会社を出て、齒の療治を受けていると、その病院に使いが来て、三浦関東州長官閣下が、見えられて、私と至急に会いたいとのことだと云う。療治中なので、少しく待つて貰つように返事して、いそいで帰社してみると三浦さんは既に退去されたあと前で、私宛の紙片にメモ書きで「事態はまことに重大で、自分達は某方面へ、今夜避退することになつた。貴君もその積りで、一刻も早く新京から避難するように……」とのことが認めてあつた。

終万一の場合は、満州国政府は、満鮮国境の山岳地帯へ避退して、持久戦に入る計画があるとか

仄聞していたので、さては、予てのその計画によるものかと推察した。その日の午後から、関東軍将兵の家族、満鉄職員の家族達が、いち早く引揚げを開始し新京首都は、全く騒然たる状態に入った。のみならず、各銀行は預金の支払停止を実施した。このあさましい有様に、私はむしろ憤りを感じた。一般の在満同胞には一顧も与えずに、関東軍将兵や満鉄の家族達のみが、真先きに逃げ出すとは何んたることだと憤った。しかし一番困ったのは、午後にはいつて全金融機関が支払停止を実施したことだった。万一の場合に備えて、午前中に会社預金の一部は引出して、従業員家族の手当準備は多少は出来ていたものの、残金は全部支払停止となってしまうた。これでは、満系従業員は別として、数十名の日本職員の家族達の疎開費用も十分でない。興業銀行の支配人に交渉してみても全然見込みがない。これには、全く当惑してしまった。が、当って砕けると思つて、予て懇意な岡田興銀総裁を訪ねて直談判に及んだ。凍結の会社預金の残額を特別の総裁指示で、内密に解除して貰うことだった。岡田さんは暫く考えこんでいたが、「では、わしから支配人に命令してやろう」とのことので、内密に解除して貰った。

私は、ほつとして小躍りもしかねない心地で、会社の会計担当係と札束を大きい風呂敷に包んで、銀行の裏口から、人目を避けて密かに出たものである。

さて、その翌十日から一般民間家族の引揚げも、開始され始めて、街中は全く目も当てられぬ

火事場さながらの騒然さとなった。

一方ソ満国境での戦闘はいよいよ不利を伝えて来た。その筈である、既にその時には、関東軍の役に立つ武器も精兵も、南方へ送出されて、大部分は補充兵達ばかりで、武器も不足している。仕末、ソ連軍の進撃には、全然抗すべくもなかったのである。

ソ連軍の進撃は、まことに快速であることが、頻々と報ぜられた。その機械化部隊は、旬日を出でずして首都新京に入るであろうとさえ伝えるにいたった。

私は、会社の日本従業員の全家族を、南の鮮満国境に近い安東へ疎開させる計画を、早速たてたが、鉄道の輸送力には限度があり、申込みの順序もあって、なかなか捗々しく運はない。会社の工場は本社とは離れて郊外の工場地帯にあったが、責任者の相馬君は召集をのがれていたのので、その責任の長として、最後まで工場に単身止って守ることを命じ、私と私の家族だけは、全従業員家族の安東疎開を終了次第、新京工場へ移り、工場と共に最後の運命を決する覚悟をきめた。

その日の午後政府国務総庁から、特殊会社関係の主脳者の呼出しがあつて、私も出席したが、時既に集合する者も少く、政府高官の大部分は既に疎開後であつて、当時の総務庁次長古海忠之氏と一部の政府部員のみが居残っていた。古海次長から、事態はまことに重大であるが、お互に

最後までこの首都に踏み止って責任を果したい、是非共協力を願いたい旨の話があった。

軍と政府は、既定の作戦とはいえ、首都をいち早く逃げ出して、一般同胞の安危に何等の措置を講じない仕打ちに、いささか腰抜共がと内心憤激した私には、古海氏の気塊が成敗は別として、わが意を得たものと感じられた。

満蓄従業員家族で男子の全員はほとんど召集動員されてしまったので、残っている者は百数十名におよぶ婦女子達のみであった。その中で、召集をのがれた四本君を婦女子引卒隊長として、安東への引揚げを全部完了したのは、十三日の夜遅くであった。私は、その時ほど、やれやれと、ホツとしたことはない。さて、あとに残った者は、私と家内と二男の二郎、それに工場に単身残った相馬君だけになった。長男一郎の消息は、遥として不明である。

私は薩摩武士の血を享け、家内も会津武士の女であるので、最後まで、その職責の当然を致して、私も家内も生死を共に、工場と運命を共にする覚悟は十分出来ていた。

私の住宅は、新京の中心地にある白山公園に沿って建てられた興徳吉租（三菱地所）所管の建物で、環境のよさと、住み心地のよさと、便利な設備では、申し分のない白山住宅の角屋敷であった。

終 いよいよ、十四日の午後、住みなれたその住宅を引払って、八キロ程も離れた郊外在の工場へ

引移って最後を工場と共にする積りだった。それには、極く短期間ではあつたが、世話にもなり、多少、心情的にも親しさを増していた満映理事長の甘糟氏に、訣別の最後の挨拶をしてから、工場へ旅立ちたいと思つて、単身馬車を駆つて満映へ走つた。

理事長室で、甘糟氏と静かに対座して「今夕家族を帯同して、工場へ移り、運命を工場と共にしたい。これまで、いろいろお世話になりましたが、今日は最後の挨拶に来ました」旨を述べた。彼は日頃と、別に変ることもなく、物静かに「私こそお世話をかけました。あなたが、仕事の全責任者として、工場と運命を共にされることは、己むを得ないが、あなたのお家族だけは、この甘糟にお預けねがえないか。この満映には原田少将が、数ヶ大隊を卒いて立籠るばかりでなく、満映の残留日本従業員には、夫々武器をもたして、最後の最後まで残したいと思つています。もちろん最後は、どうなるか判らないが、お家族はそれまで、大事にお預りしたいと思つ」と、物語りにある武士の心やりにも似た言葉を、私は聞いた。

私の家族は、かねて甘糟氏に面通した事もなければ、座談の中にも家族のことなど、毛頭話したこともなかったもので、知るよしもない筈である。私は、この甘糟氏の心のこもった言に全く感動した。が、妻も、また子供も運命を共にする決心が、すでについていたので、「ご心情まことに、うれしいが家族も私と行を共にしたいと申しているので、折角だが、お断り致したい」と

挨拶した。「では、己むを得ない。お互にこれが永久の別れになりましたよ……」と彼はうなづくように答えてくれた。

私は、この時の甘糟氏的心情に対し、今でも深く恩を感じて忘れることが出来ない。この最後の面談の後、帰宅すると、工場次長をつとめて、なかなか立派な人物であった満人の王君が、私を待ち受けていた。そして彼が云うのには、翌十五日に日本から天皇陛下の御詔勅がラジオ放送されるとのニュースが巷間に伝わっているので、工場への引越しは、御詔勅を聞いた後にしてはどうかと云う。私の家族の引越しの世話に来てくれた筈の彼の言葉には、何かを暗示するものがあるような気もした。「では明日まで待機するか……」とその日の一夜を自宅に明かした。

終
戰
後

陛下の御詔勅放送と敗戦の新京

十五日の朝、新京の首都は存外落着いていて少しの騒然さも感じられなかった。そして陛下の御詔勅が放送されるから待期して聞くようにとの、お触れがはじめて廻って来た。ラジオのスイッチを入れて待つと休戦の御詔勅である。隣組同志屋外に出て、肩をだきあって泣いた。

日本はついに敗れたのだ。負けたのだ。満州国も完全に潰えさったのだ。この放送が終るか終らぬかの時、全く間髪を入れず、満人街には一斉に青天白日旗が、サツと揚り、遠く郊外の工場地帯には火の手が蒙蒙と揚り、天をこがし始めた。既に、工場地帯には満人の掠奪がはじまったのだ。満蓄工場も、その地帯にあるので火をかむり、掠奪にさらされてしまったことだろう。

午後王君が悄然として訪ねて来て、すでに工場街は火災が拡がり、掠奪が横行し、暴動化してしまった。満人街も暴動化にちかく、日本人の行動は非常に危険だから、自宅で落着いてしばらく静観してほしいと忠告してくれた。

勿論、当初計画していた工場への引越しのときも問題外のことになってしまった。

ところで、だんだんと満人街の暴動化がはげしくなつて、中心部の白山住宅も夜分は危険になるとの気配があり、王君のすすめもあつて、私は、完づ家族を引連れて満映の社宅へ一時避難することにした。

満映の社宅に到着くと、講堂で甘糟理事長の話があるから聴かないかと連絡があつた。講堂には、満映の日本従業員が立並んでいたが、演壇側には、満映理事達の一部と、原田少将、それに客員として私もその一隅に立つた。

日頃の通りカーキ色の協和服に、つやのよい黒長靴に、金色の拍車をつけた甘糟氏が、静かに演壇に立つての話は「諸君は、これまで、満州国建設のため、高い理想に燃えて粉骨努力されたが、事態かくなつては、断腸の思いだが、致方ない。ソ連軍の首都入城も近いと思う。この首都がどう変異するか予測出来ないが、草を分け、木の根を嚙つてでも、どうにかして日本へ帰つてほしい。ついては、只今満映で都合し得るすべての現金を、各位へ、階級の差別なく当分に分配する。それを帰国のたしにしてほしい。自分は、いさざよく自決して最後をとげたいと覚悟している。自決にあつては万全を期して、不首尾を致すようなぶざまなことはしないから、ご安神願いたい……。」「大要このような趣旨の自決の宣言と、従業員への決別の挨拶であつた。一堂寂として声なく、どこかで男泣きする音のみが聞えた。

その夜、理事長室に甘糟氏をかこんで四、五人の者が集って、酒宴がはられた。古海氏（総務庁次長）青木実氏（経済部次長）等と、それに私が加った。協和服に長靴のままの甘糟氏は、別に神経質になった様子も見えず、笑いながら盃をかさね談笑していた。周囲の人々は、氏に対し「自決するなんて、馬鹿を云うもんじゃないよ……」と云って諫めてはいたが、何れは同じ運命を辿らねはならぬ同志であるので、こうした諫めも、会話のやりとりも、何か空虚なものがあつた。

私の長男一郎が、ソ満国境から帰って来ないことについても、皆なから慰めの言葉をかけて貰つたりもした。甘糟氏は問答に笑いながら至極お座なりの受け答えをしているのに過ぎなかつた。盞を重ねても、一同は別に酔がまわる様子もなく理事長室の夜は更けて行つた。

私が仮泊の社宅に引取つて、寐につこうとすると、甘糟氏の秘書が、腰に大刀をたばさんだまま私の戸を叩いて、私が自決用の青酸加里を甘糟氏に手渡したようなことはなかつたかどうか、また、氏が死薬を所持しているらしい気配を感じなかつたかどうかを質すのだつたが、全然存知しない旨答えて追返した。

一夜明かすと前日の興奮もややさめて、新京の街も尠しく平静を取戻したようであつた。私は家族と共に、一応自宅の様子を検分かたがた白山住宅へ帰宅したが、別に暴徒に荒らされた模様

もなく平穩であった。

その後折々、王君が訪ねて来ては情報をくれた。満蓄工場は一面火の海と化し、掠奪と火災で阿修羅化していることを知らしてくれた。

その後一兩日は、存外平穩に過したが、落着くと気にかかるのは帰ってこない一郎のことだった。東寧といえは激戦の地だし……、愈々その生死は不明になって来た。満州交響楽団の招聘を受けて、軍の慰問をかね、各地の演奏会に出演していた日本ビクター専属歌手の斉田愛子嬢（故人）が北満の奥地から、命からがら逃げ帰って来て、私の家に身を寄せた。

またハルピン地区から新京へ逃げて来た人々の話によると、日本の男子は殆んど狩り出されて、残った婦女子達は、己れの生活を守るために、満人の苦力、クリー人車夫、ヤンチヨ馬車挽達にまで、身をまかせる者が続出して来た。それ迄、夢想だにもしなかったことを伝えて来た。ソ連軍の首都新京への進入も、刻々迫って来ることが感じられた。

かくする中に、関東軍の司令部から火の手が上がった。これと同時に司令部をめぐけての満人の大掠奪が開始された。火ぶたを切ったのは満人達が先手であったことはいうまでもないが、日本人達も満人と同様血まなこになって大掠奪隊に加っていった。かくなる時の人間の姿は全くあさましいものである。

甘糟満映理事長の自決とその埋葬

八月十八日の朝、七時少し過ぎた頃であつた。電話のベルがけたたましく鳴つた。出てみると、甘糟氏の秘書である。泣きじゃくるかに、只今甘糟氏が自決して倒れたという。

自宅から満映迄は四キロ程も離れていたが、とりあえず馬車を駆つて満映へかけつけた。急ぎばやに理事長室に飛込んでみると、甘糟氏が、協和服に長靴のまま、長椅子にあおむけに倒れている。いまだ他に弔問の人もなく、その自決を知つてかけつけて来る人とてもなかつたようであつた。すぐに秘書が現れて、「残念ですが、この通り立派な自決です……」と声をくもらした。

きちんと整頓された理事長室の卓上に、呑みさしの水のコップが残っていた。秘書の話では、甘糟氏は、起床後、平常の如く髯をそつて、毎朝好んで散歩していた湖西会館の芝庭を、静かに漫歩しての後、理事長室に戻るなり、卓上に残っていたコップの水で、ひそかに所持していた青酸加里を服用したらしい。そして暫くした後、秘書を呼ぶベルを押した。かけつけて行つた時は、すでに口はさけず、そのコップを指さしたまま、崩れるように倒れたそつである。

しばらくして、人々がかけつけて来て、デスマスクをとつたり、供華が飾ざられたりしはじめた。

八月中旬ともなれば、満州はすでに秋である。野にも庭にも萩が美しい。虫の音がそここにきこえる。秋風が身に泌み初める。黒い満州の土、湖西会館庭の西隅を掘って、甘糟氏の死骸は、大陸の黒土に埋葬することになった。

急ごしらえの白木の柩に死骸はおさめられ、満映の若い同志達によって柩は担がれた。方形に掘りさげた黒土の穴は、庭一帯に咲いた赤い花萩を手折って、一杯に波打つかのようにしきつめられた。故人を送る同志を代表して、満映理事の一人である和田日出吉君が、故人に語りかけるように、泣きながら告別の辞をのべた。そして柩は男達のすすり泣きの中に、静かに、静かに、花萩の上へおろされていった。

私は、その時ほど、故人をうらやましく思ったことはない。世の批判は別として、男として、やりたいだけのことを存分にやってのけて、大陸の黒土と花の中に埋められる最後、しあわせな男だなど思わずにはいられなかった。その埋葬に満映以外の者として立会ったのは、私と古海戦氏、その他二、三の僅の者のみであった。

終 歌にある如く、満州大陸の夕陽は、まことに赤い。その日の夕陽は故人の死を賛えるように一

入に真赤で、秋風そぞろに泌みて、虫の音が四辺に満ちていた。

ソ連兵の自宅闖入

私の住宅は、首都中央の白山公園の南側にあった。公園は相当に広大で、満州特有の柳の大樹、アカシヤ、ライラック、杏の樹々が茂り、丘陵的な起伏も適当にあつて、春先ともなれば、色々の花が美しく咲いた。道はその園内を羊腸のごとく通じて、歩して思索するによく、口笛を吹き吹き犬と遊ぶによく、少年達と大陸にかけた夢を語るにも、またこよなくふさわしい公園であつた。

大陸の興亡を刻した古い碑が杏の大樹下に、ねむるかに建つていたことを憶い起す。住いの西には近く首都警察本部があり、また、それに隣接して満州電信電話公社があつて、放送塔が高くそびえていた。中央の広場を、はさんで満州中央銀行等の堂々たる大厦高樓が立並んでいた。巖然と偉容を誇る関東軍々司令部もさして遠くはなかつた。

私の住いの隣人としては、左隣に政府經濟部次長青木実（故人）二階隣りには、日本人会長の小野寺直助博士（新京病院長で、一昨年文化功労章を受けられた）が住んでいた。

さて、ソ連軍は、まことに快速をきわめ、首都新京へ新京へと、その機械化部隊の精銳は、日夜をわかたず進撃をつづけて来た。先づ、最初の占拠を、電々公社とその放送局に向けられたらしい。そして十九日の正午頃には、ソ連軍先鋒の一部が這入りたらしい模様であった。

その日の午後、自宅の玄関のベルが、はげしく鳴り響いた。物かげから、ひそかに覗いて見ると、ソ連兵の大男が二人しきりにベルを鳴らしている。背には短い軽機関銃をかつぎ、土色にさびた長靴をはいた逞しい敵兵である。

かつて、怒濤の如くベルリンへ侵入したソ連兵が、ドイツの婦女子を無惨に蹂りんした際の酸鼻を極めた実話を、シベリア経由で以前に引揚げて来た記者連中に知らされているので、その凄惨な相を想起して―さては困ったことになったと全く当惑してしまった。

玄関を開けなければ、どんなことになるか計りしれないので、家内と斉田愛子嬢に用心するように目くぼせして、私は玄関を開けに出た。ソ連兵は大きい声でわめきながら、その長靴のまま土足で、づしづしと畳の上へあがりこんで来た。するとカナダ生れの二世として育ち、伊太利で後歌の修業をつんだ斉田嬢は、相当に度胸もすわっていたし、派手な服装に、満電放送局芸術家と戦しての、大きいバッジを胸につけていた。彼女は英語だったか、伊太利語だったか咽嗟のことで終知らないが、兎に角、少しのためらいもせず兵士に対して、しゃべりまくった。「私は、おまえ

らの占拠した放送局の専属歌手である。私達を傷けたりしては許るされないぞ」というような問答であったようである。この二人のソ連兵は齊田嬢の口舌にまくし立てられて、むしろ呆気に取られたようにも見えた。彼の兵達は、急に気を抜かれた如く、おとなしくなつて、部屋中を土足のまま珍らしそうに見まわつて、そのまま出て行つた。

土足のまま敵兵に乗りこまれる心地は、現にそれを体験した者でなければわからない。これが最初のソ連兵乗込みの一場面であつたが、まあ無難に過ぎたので、やれやれと胸を撫でおろした。その後引きつづきソ連兵の襲来は、操返えされたが、いつも難を逃れて大事にはいたらなかつた。それは首都中央部駐屯の兵は、ソ連軍の中でも、おだやかな部類のようであつた。それでも42私達はその襲来に備えて、裏門や玄関を鉄板で張りめぐらして防壁の如くした。

さて、単身工場に残留さして、私の家族と運命を共にする筈の、相馬君の生死も、長男一郎の運命もかいもく不明であつた。が或る日、ひよっこり相馬君が現れた。工場地帯が火災と掠奪のるつばに帰してから、満人に扮し数日を要して、私の家へ辿りついたのである。しかし一郎は、帰つて来る気配はなかつた。

ソ連軍入城後の新京情況

その後続々とソ連軍が侵入して来た。あちこちの民家に侵入したり、掠奪が行なわれ、婦女子への暴行が白昼でも平気で行なわれたりした。市中のおもだった諸会社のビルはソ連軍によって占拠され屋上には、何れも赤いソ連国旗が立てられていった。

中心街近くにあった満蓄の四階建の本社事務所も占拠された。各室の事務机内は勿論のこと、隅から隅迄調べられた。大金庫が兵達の鉄槌で破壊された。責任者たる私に、兵士達が赤いキレを取りつけた短銃をつきつけて部屋中を案内させ、社長室の私の部屋に備えつけた大きい電気蓄音機を、操作さして、美しい音楽に驚愕して大悦びした。すぐ様大型トラックをビルに横着けにして、事務所にあつた、すべての物を掠奪して去つた。上衣をかけるハンガーから、帽子掛けの一片までも持ち去つたのである。

後 戦 終
ソ連兵によつて、私の事務所が、このように占拠されない八月末から九月初めにかけての約一週間ばかり、満州国政府総務部長官の栄職にあつた武部六蔵氏（故人）を友人の赤瀬川君が、ひそかに帯同して来て、私の事務所の四階奥の一室に一時かこつてほしいとやって来たりした。

武部氏はソ連軍入城後転々として諸所にかくれ廻つての後、私のビルに暫時落着くことになった。万事の世話は赤瀬川君がやるので、私には少しの手数にもならないし、時折り事務所の様子を見に行く折りに対談したぐらいのことだったが、武部氏は黒い満服を着用して満人に扮していた。少しの憔悴の様子もなく、いつも応揚に皓齒の美しさを見せて話していたのを憶い起す。その後、私の事務所も危険になったので、さらに他所へ落ちのびて、そこで遂にソ連兵に逮捕されたと聞いた。

街中の主たるビルや事務所の、占拠掠奪が一応終る頃になると、ソ連兵の個人的な暴挙はなお止まなかったが、恐怖の中に街は少しづつ、それなりの落着きを取戻して来た。しかし政府要人や、特殊会社主脳達の搜索逮捕が開始されはじめた。

戦時中は物資不足で、思うように入手出来なかった砂糖や小麦粉が街に沢山出廻つて来た。何れも関東軍の物資貯蔵庫から満人達によつて掠奪されたものばかりである。

終戦まぎわに召集されて参戦した会社の従業員達が敗戦で一部帰還して来る者も、ぼつぼつ出て来たが、今度は、さきに疎開させた従業員家族達の安東が、新京より危険が多くなつたとの連絡があつた。この連絡に安東から帰つて来た四本君が、途中ソ連兵や、満人の掠奪にあつて、禪にまで隠しもつた多少の所持金は勿論のこと、一糸も纏わないと云つてもよい乞子同然の格好で

やって来た。

そこで、全家族を安東から新京へ再び還す計画をたてて、会社の寮アパートに収容することにした。さて、その全員は婦女子達ばかりなので、無事安全に新京に帰還させることにはなかなか苦辛したが、四本君の指導よろしきを得て、兎に角、どうにか一人の事故もなく無事にやりおうせることが出来た。

さて、それからは全従業員家族達の生活を、日本に引揚げるまで、どうにかして保全してやる工夫をせねばならない。生活だけではない。万一婦女子が傷づくことがあつては、参戦の苦勞から、引続いてソ連へ行つたその夫君達にも申訳が立たない。で物質的のみでなく、精神的にも間違った違いが起きないように見守つてあげねばならない。

万一の最後の場合にと大事にして、とつておいた会社の残り金を、それぞれの家族の様子に応じて、少しづつ分配して与えることにし、一方私の私物を社員達に売却させて資金をつくつた。男主人のある家族には多少でも自力自活を促した。

後 会社寮の一階の一部を喫茶店に改造して婦女子達に働いて貰つて一部の生活を支えた。しかし、婦女子を店に出すことは、危険なので男が持運びのサービスに当たるといふ仕組であつたので、あまり繁昌の見込も立たなかつた。

新京一中学徒救出隊の隊長となる

長男一郎の生死は依然として不明である。私は幼少スパルタ式の教育を受けたせいで、こつも考えていた。何れは祖国にささげる積りで育てた子供である。心身共に頑強なれば、そして天運に恵ぐまれば、木の根を嚙つてでも、いつかは還つて来るはずだ。不甲斐なければ不還、またそれもやむを得まいと。そして、これは私の日頃の死生観にもつながるものであった。新京一の少年達で、ソ満国境に狩り出された生徒が、一郎を含めて五、六十名位もあつた筈である。そして、その生死を知らんとし、その救出をソ連軍に嘆願する父兄の集合が再三開かれるようになった。

私は当初、こうした集合には余り関心をもたなかつた。それは一郎の死生は、その自力と天運に俟つのみであると思つていたからである。

すでに満州の秋は過ぎて、初冬がやって来る時ともなると、ソ連兵の来襲よりも、その厳しい冬將軍の来襲が一層恐ろしくなつて来る。赤い夕陽の沈む東寧の方角の空を、遙かに望んでは家内が思い沈んでいる様を見たり、深夜門外に物音がすると、一郎が還つて来たのではないかと出

て見たりする母親の心情をあわれに思うようになった。そのせいか、私も少しく救出に関心を持つにいたった。少年達の生死を確かめるために、他の父兄達と共に、世話係りを通じて、ソ連軍の幹部に贈物をしきりにしたりして調べて貰ったりもしたが依然不明であった。

当時ソ連軍は殆んど横の連絡がなく、離れた他の軍団との連絡は皆無であった。吾々の貢物はいつも烏有にひとしかった。さらに、終戦に当って日本に叛いてねがえりを打った満軍の一部と土民軍が一諸になって新編成の臨時満軍も出来上っていたので、この方にも、わたりをつけたりしたが、全く梨のつぶてに等しかった。ために、その生死も、所在も不明だし、救出の手段も立てるにも手がゝりがなかった。

ところが、一郎等と一諸に東寧へ行った二人の少年が、突然十月初めになって、逃亡に成功して、新京に辿りつけて還って来た。この二少年の行動は、まことに英雄的なものだったが、その報告で一郎達は東寧から、激戦の弾雨下を南へ逃る途中、東京城で、ソ連軍に逮捕され、そこに收容されているが、そのまゝ放置しておけば、栄養失調のため、遠からず生命はおぼつかないとのことがはじめて判明した。

戦 後のこの知らせを得て、父兄会、責任者たる校長、先生連中も、手がかりに光明を得て活気づき、終愈々救出隊を組織することゝなった。ソ連軍と満州軍に、北満奥地潜行の護証を貰う運動や、救

出隊員の選衡にとりかゝった。当初、父兄達と担任先生をまじえて約二十名の希望者があったが、何分にも生死をかけての奥地潜行であるので、段々尻込みする者も出たり、家庭の都合や、病気のために行けなくなったものも出て、結局十二名になった。事実、奥地は、未だ秩序がある訳でなく、硝煙と血生臭い阿修羅の戦場が、そのまゝに残っている際で、たとえ護証があつても、日本人が逆に潜行することは、余程のことではなければ困難なことだった。

しかし、一刻も荏苒延ばすわけにはいかぬので、愈々一行の出発は十月二十日と決せられた。この頃になると、満州は既に初冬で、零下二十余度にも達する日がある。さて、いよいよ出発となつて集合して見ると、僅かに四名。うち一名は篤志的に道案内と通訳をかつて出てくれた総務庁事務官の安藤君と、他は二十二、三才の青年二人、父親としては私だけのたった四人の小人数である。青年の一人の間島君は満州医大の学生で弟の救出のためであり、他は現パシフィック野球団会長中沢不二雄氏の長男を救出するために、その親戚の一青年であつた。

少年隊救出のために、当初集合した人々は校長を初め、担任の教師、父兄共、五、六十名の者が協議し、相互に督励し合つて救出の冒険を共にせんことを誓つたりしたが、それが二十名になり、十二名になり、最後には、父親として私がたった一人となり、他は二、三の青年のみとなつて、少年学徒を派遣した責任者とも云うべき学校の校長も先生も、遥として姿を見せないばかり

か、親子の情を声高になえて、その救出を督励しあっていた父親達も、これまた影を消してしまつた。いかに口先きだけの唱え念仏が無意味であり、親子の情愛といえども、自己を守るためには薄紙の如く弱いものであるかを見せつけられた。

それでも少年達の母親達が綿々とした母情を書きつづつた数十通の手紙を、リュックにつめこんで出発することにした。

新京―ハルピン―牡丹江―寧安―東京城への潜行

新京駅からは掠奪品を満載した貨車が、ひっきりなしにシベリアへ向って動いた。その間にソ連軍の引揚兵を満載して出発する貨車も多く見受けられた。駅管理のソ連軍将校に特別の許可を得て、私共四人は、ソ連軍の引揚列車の一つによつやく便乗をゆるされ、先づハルピンへ向つた。

案内と通訳を受持つてくれた安藤君は、関東州生れで、未だ二十才ばかりの青年であつたが、日霜協会出身であるだけに、支那語と露語に堪能であつたばかりでなく、大陸育ちの逞ましい度胸の持主であつた。この人を得たことは、全く神助と云つても過言ではない程、仕合せなことだ終つた。

列車には引揚帰還のソ連将校で一杯だったが私達はその一隅に小さくなって座した。のろのろと進行する列車は、その日の深夜になって、ようやくハルピン駅に到着した。忘れもしない、その夜は文字通り、氷の如く寒月が澄んで、寒さは肌をつんざくほど、きびしかった。駅の構内には掠奪品を満載した貨車が一杯つまっていて、私達の列車は駅から二、三キロもある手前に止つて、そこで下車を命ぜられた。ソ連将校達は、彼等の大きいトランクを駅迄運搬するよう私達に命じた。

私の身体よりも大きいトランクを担いで、敷石のごろごろした鉄路沿いに、よろよろよろけながら、運んだあの寒夜の月ほど、私共にとって残酷なものではなかった。それでも一応運搬をどうにか終つたのは夜明けにまのない午前三時頃でもあつたらうか。

零下二十余度の寒さの中で、一睡もしていないと睡魔がしきりにやって来る。駅には暖房など勿論ない。将校達は焚火しながら暖をとっていたが、兵士達は四、五人づゝが一組になって、あたかもメザシの串ざしのような具合に外套を被むり抱きあつて、シンシンと凍る土間のコンクリート上にじかに寝ているのである。全く恐るべき耐寒力である。無神経さである、寒さに対する耐寒的構造が先天的に異つてもいるのであろう。私達は寒さと、疲労と睡魔で身の置きどころがなかった。

苦力の満人達は、うじ虫の群れが渦をなして盛りあがりを作るように、二十人ばかりづゝが小山のような人山をなして、お互の体温で暖をとりあっているのだった。私達もその苦力達の中に飛びこんで、夜明けを待ちつゝ暖をとった。こうなると満人の苦力と撰ぶところはない。が、苦力の群は、また、虱や、だにの集団といつてもよい程の不潔な人群である。

夜明を待つて、一応ハルピンの日本人会本部宿舎をたづねて見たが、人々の話では、ハルピン以北は、未だ戦場にひとしく、這入りこむことはとても無理であること、牡丹江以北の山中には、未だ日本兵が立籠っていて、警戒がきびしく、日本人は危険であるとのことである。

宿舎の一隅では、逞しい邦人の四、五人が車座をして花札トバクをやっているのを見た。聞け51ば、満州中央銀行東寧支店の家族達が還つて来ないので、同地方の地理に明るい憲兵あがりや警察官あがりの人達に、銀行から大金を託して、その救出方を依頼したものである。依頼を受けた一行は、ハルピンまでは来たものゝ、その先きが行ける見込みが全然立たないので、金はあるし、金さえあれば酒もある、女にも不自由しない訳で、依頼された重大な責任を忘れてしまっている連中であつた。私は少からず、その連中の態度に憤りを感じたが、これも人の本当の姿の一面かもしれないと諦めもした。

ハルピンよりソ連将兵帰還列車便乗の一夜

さて、こうした連中と、一刻もゆっくりしている訳にゆかぬ。再びハルピン駅にとって返して、牡丹江迄ソ連軍の引揚列車に便乗する方策を講じた。この区間は険しい山嶺を越さねばならないので、車や徒歩では、掠奪、惨殺か、凍死の淵へ飛び込むにひとしい。最も安全な方法は、ソ軍引揚列車にうまく便乗することである。だが、そのこと自体がむづかしい。将校連中への手掛りも全然なければ、奇策もない。そこで、ソ連兵を上手に買収して、どうにか列車にもぐり込む手しか道はない。安藤君がソ連兵に幾度か金をつかまして買収を試みた。ソ連兵はおおまかで、お人好しというのか、軍律が乱れているという訳か、金をつかませると、いい諾々として承諾する。そして私達四人のけつを押し上げて便乗させる手伝をする。だが、既に溢れるように乗り込んでいるソ連引揚兵士達がヤポンスキー（日本人）の私達の同乗を許るそうとは決してしない。兵士がわれ先きにと乗込む引揚列車のことだから、何回も、這い上っては蹴落されてしまった。やっぱり、駄目か、それにしても少年達の生死はどうかしら、一刻を争う時なのにと、悶々として戸惑った。

丁度その時、引揚列車の一將校が、手を怪我していて、私達一行の間島君が赤十字のマークのついた医療箱を持っているのに気付き、その怪我の手当をたのんで来た。間島君は渡りに舟と、美事にその療治をしてやったものだ。するとその將校が間島君だけ一人の便乗を許すという。では困るので、是非共四人の同乗をと、おがむように頼みこんだのが、まんまと成功して私達の便乗が許るされた。

引揚列車といつても、むろん客車ではない。ガタガタの貨車である。車の一隅の函に砂を入れて糞尿の用にもちうるのである。発車して私は本当にほっとした。せまい車内は中佐が一番の上官で、佐、尉官級の將校ばかりだった。私達ヤポンスキーの四人連れは、内心ほっとして、一隅に小さくなっていた。停車する毎に、便乗を欲するソ連兵達が、私達ヤポンスキーを降ろして、乗りこもうとするが怪我の手当を受けた將校が、私達をかばって、それを拒みつゞけてくれるのだった。

途中既に雪となったが、停車駅では、満人達が、貨車の屋根に這いのぼって、つぎの駅迄の便乗をしようとして、蠅がたかるように、うるさい。やはり吾々には想像も出来ない程遅しい満人の生活力である。数千年の興亡の中に、零下三、四十度にも及ぶ寒さの中に、遅しく生きつゞけて来た満民族のおそろしさを知らされるのであった。

発車間近かになると、ソ連兵が棒切れをもって貨車の屋上の雪にうづくまっている満人達を、蠅を追う如くして追払うのだ。この騒々しい風景に、車内の将校達は、全然無関心で、神経のない人達の如く、平然としてトランプを楽しんでいるのだ。これも、また素晴らしい応揚さであり、神経の太さである。将校達はなごやかに談笑するか、トランプに打興じるか、まことに春の如き車中風景である。私達はその片隅に、たむろしている如きには少しの気にも止めない風である。勿論、貨車には暖房はない。凍りきった隙間風が吹入れるがお互の体温で、むしろ暖かい。シベリヤへ続く北満の密林の山は深い雪になった。

夜になると、サイダーの空瓶にローソクを立て、灯が入る。漸くトランプや談笑にあきた将校達は、交互に三人づゝ立ちあがって肩を組み、素晴らしいバスで民謡か軍歌かしれないが、音頭をとって唄うのである。すると車中の全員がそれに一斉に唱和する。ローソクの灯影が兵士達にゆらぐ。歌はいつ果てるともなく、つぎつぎに音頭をとる組が変わって、じょうじょうとして続くのである。こうしたロマンチックな夜は、私の生涯にまたとないほどのものだった。私は一郎のことも、家族のことも、また私の生死も忘れ去って、この素晴らしい雰囲気に融け込むばかりであった。

満州軍に逮捕され牡丹江刑務所留置場に入る

牡丹江に着いたのは、翌朝の七時頃であつた。すでに三十度近い凍る寒さに、粉雪がサンサンと降りしきっていた。汽車を降りて駅外に出た私達は、さて、それからの方針を立てねばならぬ。

駅前の屋台店に一応腰をおろして、温い豆乳を呑みながら、相談をしていると、丁度屋台の向い側に座して、私達を怪訝そうにギョロギョロ見て居た満人が、つかつかと近寄つて来て「どこからやつて来たか、護証を持っているか？」と訊問するのである。新京からハルピン経由で来たことを答え、持参の護証を見せると、彼は、その護証は「一行十二人で、吉林経由」の筈であるのに、一行四人であり、経由はハルピンと相違していると、威だけ高に怒なつて、私達を警察へ連行すると、云い出した。

後 丁度、その際は、東京城一帯の山岳地に、降伏しない日本軍が立籠り、寒さと食糧に困り蠢動し初めたとの情報が流れて、牡丹江以北はきびしい警戒に這入っている時であつた。しかも、日本人で新京やハルピン方面から逆行して来るものは、誰一人としてもいない危険な際であるの

で、山中の日本軍と連絡をとるために、ひそかに潜行して来た者と怪やしまれたのも、また当然であった。

そのうちに、赤腕章をつけたソ連兵がやって来るし、銃をもった満軍の兵が四、五人馳せつけて来た。事情を説明しても一向に聞入れない。私達は満軍の兵五人に守られて、警察の留置所へ拉致されてしまった。途中兵士達は、私達を銃殺するかの如くおどすのである。四人は刑務所の一室に叩き込まれてしまった。

その時、自分の生死には少しの不安も感じなかったが、折角こゝ迄辿りついて一郎や少年達の救援に間にあわずにしまうことがあってはと思うと残念でならない。ハルピン駅で苦力群の中に飛びこんで一時の暖をとったために、衣服も身体も、虱の巣窟になって、痒ゆさで瞬時もじっとして居れない程であったが、さらに刑務所の留置室は不潔きわまるものだった。

寒さと、虱で、まんじりとも出来ぬ一夜を明かして、その翌朝取調べを受けることになった。幸なことに取調べの担当課長が、日本語によく通じている満人だったことゝ、少年達の母達から託された数十通の手紙によって、日本軍と通謀するものでない、純然たる救出のためであることが判明した。しかし凍る部屋で、裸かにされて、服のすみすみから、所持薬のすべてにいたるまで、全部をひらいて取り調べを受けた。かくして、一難また去るの思いがして刑務所から放免さ

れた。

寧安日本難民収容所に泊す

さて、其処からは、寧安を経て東京城へ向はねばならない。が徒歩では日数もかゝるし危険至極である。そこで、再びソ連軍のトラックを買収して、そのかげに隠れて、東京城へ潜入することにきめた。

雪のちらつく牡丹江郊外の道ばたの木陰に伏して、ソ連兵の寧安行らしいトラックを待った。ソ連軍のトラックといつても、現在米軍使用の青い幌を被せた米国製トラックである。物資を積まないで、塔乗員一、二人の運転車に手を挙げて止め、金で兵を買収するのである。これには存外容易にソ連兵はひつかゝる。しかし寧安では駐屯軍に目につかぬ処で下車する契約が出来て、今度はトラックの幌にかくれて、私達は寧安へ這入りこんだ。

後 寧安の「日本難民宿舎」をたづねて一泊することにした。宿舎はガラス戸は破れ、壁もかたむきかけたバラックで、板張りの部屋はしんしんと吹きさらしで寒い。収容されている者は、殆んど日本女性達で、ひどい女になると麻袋に首を通す穴をマントの如くあげて、それに一糸もまと

わぬ身を包み、うすぎたない一片の布切れのごとき薄い毛布に身をくるませ、難民同志抱きあつて暖をとつて居る仕末である。床からは隙間風が吹き上げて来る板張り、勿論敷物もない。麻袋をまとい一片の布切れで寒をしのぎ、食も碌々与えて貰えぬ酸鼻の地獄である。稍々元気そうに見える女達は、ソ連兵にすべてのサービスを強いられて、一片のパンを得ている女達ばかりである。

さきにソ連兵侵入の当初、野獣の如く獣慾にはやる兵達は、日本人、満人のみさかいなく街の婦女子を冒かすので、町の長老とソ連軍との話合で、日本婦女子のみの難民收容所を設け、これを満人家族への侵入を防ぐ城砦としたものである。従つてこの宿舎の難民はソ連兵への肉の生にえとなつてゐる婦女子達ばかりであり、すべてをさげ、心身共に搾取されつくされた女達は、麻袋に身をつむむ、うつろな生ける屍となつてゐるのである。私達はこうした麻袋組の女達の部屋に入れられて、糞尿の悪臭と、虱の巣窟の中に四人抱き合つて横になつた。

寝つこうとつとめても凍る寒さに寝つかれない。冷えるので、ひっきりなしに部屋中の者が尿に立つ、それでも、どうにか夜をそこに明かした。

愈々最後のコースの東京城行である。例によつてソ軍兵のトラックの買収である。寧安郊外の雪の一隅に身を潜め、買収するのに都合のよさそうなトラックを待ち受けるのである。安藤君、

がうまく話をつけて来て、私達は、またトラックの幌に身をひそめての潜行となった。全くスリルな潜行である。東京城には、ソ連駐屯軍団の司令部があったが、例によって人目につかぬ処でトラックを降りて、司令部を尋ねた。

護証を見せて、少年隊を救出に来た旨を述べた。最初は先方も突然のことだし、なかなか信じて聴きとゞける様子はなかったが、私共の誠意が通じて、少年隊の收容所を一大尉が付添って、私達と一諸に検分することになった。

東京城日本難民收容所の惨状

その收容所は学校の校舎跡であつて、一部は病人の收容所になつていたように思う。さてソ軍大尉に付きそわれて、收容所に行つて見ると建物の窓枠や扉は、殆んど暖をとる薪にはぎとられ、コンクリートだゞみの部屋は、零下三十度近くの寒さに吹きさらされている。ひどい栄養失調で全く生気を失いきつた瀕死の少年達は、放心しきつた山猿のように、ぐったりと折り重さな戦るように、收容されていて、この世の様とも思えなかつた。

終　その少年達の中に私は氣息奄々とした一郎を見出した。周囲に新京一中の学徒達らしい一団と

おぼしき少年達がいた。ひどい栄養失調で、人間が衰弱の極に達すると、何れも猿のごとき面貌になって相似して来るものだ。頭骸骨の外観は、何れも相似て一見、見わけがつかないのと同じである。

一郎は、眼前に父親の私を見て、すこしく、にっこりはしたようだったが、唯々放心した者のように、特別に素振りを変える様子もなかった。やはり意識が朦朧となっていたのかも知れない。私はソ連の大尉に『これが私の子供だ』と告げた。すると大尉は目をうるませて、早速連れて帰えれと即座に言ってくれた。

この許しを得て、私達は学徒で生き残っている三十余名ばかりの少年達を、そのがらんどうの60収容所から、遠くない別棟の宿舎に移すことを許された。その晩は、少年達にパンを与え、掻き集めた薪を焚いて介抱した。失調のひどい者は、しきりと血の下痢をして、意識もはっきりとしない少年が数名あった。かくて一夜を明かしたものの、さて、どうして瀕死の少年運を、連れ帰えられるかが大問題である。

翌朝になると、その病棟に病人として這入りこんでいたらしい四十才前後とおぼしき髯ぼうばうの一日本人が、私のもとにはいずるようになり、やって来て、極秘だが「自分は日本軍の現役少佐である。現在日本の兵団が、未だ山中に立籠っているので、自分はその連絡員として、密かに病

人に扮してこゝに入院している者だ。この街の難民収容所では、日本軍将兵の家族、それに北満奥地一帯の在住の婦女子が収容されているので、新京方面の様子を報告旁々難民収容所を二、三訪ねてくれぬか」と云うのだった。その男のまなざしには真実が窺えたので、私は单身案内して貰って慰問することにした。

難民収容所といっても、ソ連軍や、東京城の町で特別保護を加えているものではない。男といふ男達は全部戦と使役に狩り出されて残った者は婦女子達のみである。これ等のか弱い腕で組立てられた藁蓆葺きの、ほつ建て小屋が、群落をなしている。案内されてその一屋に這入ってみると、ローソク灯を中心にして女人連が十人ばかり群れをなして、あだかも地獄の底から這出して来たような様相をして私の話を聞くのであった。

かような集団を二、三慰問して帰ったが、夕陽が赤く染む頃ともなれば、その収容所から東京城の満人街へと、あだかも蟻道が出来たように、日本婦女子達が、三角帽や、マフラーで髪をおおい、背には乳呑児を背負って、ぞろぞろと、むしろ壯観ともいふべき集団行列をなして行くの
後
を私は見た。

戦
少佐に聞いて見ると、日本婦女子は家財のすべては勿論のこと、身に纏うものを次々に売り払
終
い、最後に残った一片の櫛までも売って食を得たが、かく寒さが酷しくなつては、すでに売るべ

きものもなく、とるに暖なく、さりとして飢死、凍死する訳にもゆかぬので、かように夕べともなれば満人街へ出掛けて、みさおと引替えに一片の食を貰い、暖を得て、悲しい余命をつないでいるのだと聞かされた。そして山中へ逃げこんでいた男性が一人でも戻って来て現われると、その男をたよりに婦女子が群れをなして集るといふ。なんとという奈落であろう。こうした世界には、ただ己れが生き延びるためだけの願いのみがあつて、母でもなければ子でもないほど、悲惨な奈落が存在することを私は見た。

どんなに偉らそうなことを云つても、人間が奈落の底に落ると、全く獣同然になるものだと知つた。こうした世界には、少しの救いも、神仏もあつたものではない。ただ自分一人の力だけが頼りになるばかりである。

さて、一刻も早く引揚げにかからねば、北満の冬は益々酷しくなるばかりでおそろしい。

ソ連軍司令部に引揚げの挨拶に行くと、其処に收容されている少年達を、出来るだけ多く連れ出せとの命令である。收容所には学徒少年達の外に、国境の屯田兵に仕立てる積りで、日本の農村から連れて来て、農作に従事させていた田舎育ちの少年達も同居していた。彼等の大部分も、ひどい營養失調にかかっているのだが、さて彼等迄連れ出すことにもなれば、その費用はなし、手段も困難だしするので当惑してしまった。一方、郊外の難民收容所には、中央銀行東寧支店の

家族が居ることも判明したので、是非これも救い出してやりたい。

そこで、開拓農の少年達の中から、先ず歩行可能で、気力の残っている者のみを選んで救出し、他は、まことに非情だし、残念だが、そのまま、其処に残さねはならぬことになった。すべてを救わんとすれば、すべてを殺すことにもなりかねないので、それより仕方がなかった。一部の元気のある少年達を選んで、他をその死地に残すことにした時、残こされる少年達が、全く断末魔の呻き声をあげて、一斉に泣き叫ぶのであった。私は、今もってその少年達の、たとえばのない悲しい泣き声を忘れることが出来ない。私は、骨の髄までつき刺すような、その恨みをこめた泣声を憶い出すと、今でも、ぞつとして、たまりかねる思いである。

東京城よりの脱出行

かくして、結局新京一中の少年と、開拓農少年、それに中銀支店の婦女子達を合せて、約八十名を救い出すことにした。

戦地獄の底にも、思わぬ救いがあるもので、私達の行為が天に通じたのか、東京城在の紅卍会の終僧主から、私の卒いる難民一行のために、トラックを提供してくれるとの申出が、降って湧いた

ように出て来た。私は、まったく手を合わせて感謝した。

さて一行は二台の無蓋のトラックに分乗して東京城を出発したが、瀕死の少年達や婦女子達は、凍る寒風に吹きさらされ、悪路に打ち揺られるままに、トラックが部落に停車することに、硬直してしまって、既でに息をひきとっている者が、次々と出た。私達は、その都度その死骸を車から下しては、死人の頭髪を鋏で切って少しづつ封筒に入れ、名前だけを記し、野良犬の掘り散らさぬ様に、道端の土を掘ては埋葬し、合掌しては、また行進せねばならなかった。一郎の友人達も、途中四、五人の者がこうして死んで行った。こうした悲しい行進をつづけて、漸く寧安の難民収容所に一先づ到着いて、一泊することにした。

私は落着くなり、寧安の紅卍会の僧主を訪ね、翌日のトラックの提供方を歎願した。僧主は、トラックを牡丹江まで出すことを心よく引受けてくれたばかりでなく、氣息奄々とした少年達や婦女子を見舞に来て、唐もろこしの粉を一袋寄贈してくれた。

牡丹江までの山道は非常に険しく、またまた数名の死者を出したが、硬直した死人を見ても、私は涙はすでに涸れはてて、心は氷のごとくなっていた。むしろ事務的に等しいほど平気になって少年達の死骸を土に埋めた。

引揚列車の日本婦女子へソ連兵の夜襲

ようやくにして、牡丹江に着いて見ると、駅前の広場には、武装解除された数しれぬ日本兵の捕虜が、泥にまみれて、土下座したり、地に伏したりして、シベリアへの輸送を待っているのである。信頼しきっていた、かつての日本の将兵達の、かくもみじめな泥寧のごとき姿を見ることは、敗戦とは云え、あまりにも情けない思いであった。

その夜、ハルピンへの難民引揚列車が、運よく出るといっているので、私達の一行は、一台の貨車にありついて便乗を恵ぐまれた。貨車の一隅に馬ケツや石油の空缶を備えて、藁むしるで囲いをし、便所を急造した。それは婦女子達のために必要であった。寒さと、衰弱のためにこの急造の便所は大繁昌した。夜九時頃にもなると、引揚列車は山中の部落の駅に停車して動かなくなる。

そうすると、引揚列車を日かけて、ソ連兵の、婦女子達への夜襲が開始されるのである。さ

後　て、今度はその夜襲を撃退する工夫をせねばならない。中銀東寧支店員の家族中に一老医者がい
戦　た。ソ連兵は虱が媒介する。パラチブスを非常に嫌うので、めばしい婦女子をパラチブスの瀕死の
終　重病人に仕立て、その周囲にローソク灯を立て、注射器、聴診器、薬等を並べたてて、重病患者

の擬装をしつらえた。万一の襲撃に備え、安藤君の上手な説明で撃退するという仕組である。再三の襲撃もこの名案で、私達の集団は、どうにか切り抜けが出来たが、隣りの貨車からは拉致されて行く婦女子達の、わめき声や、悲鳴が寒夜の密林を揺動かして、ひっきりなしに聞えるのであった。こうした凄惨な情景を繰返しながら、夜明けを待ち、列車の始動に、また、ほっとして待望のハルピンに到着した時は、私達までも全く心身共に疲れ果て、瀕死の病者のごとくなってしまう。途中、どうにか一郎の命は、つなぎ止めたものの、数名の少年達が途中死んでいったことを思うと、初めて悲しさがこみ上げて来るのであった。

ハルピンで、難民宿舎に一同泊したが、全員安心はしたものの虱の夜襲で一睡も出来ないほどで、山猿共が虱の巣窟に這入りこんだような惨状である。ハルピンからは新京への難民引揚列車が、数本出たので、存外苦労少くして新京に帰ることが出来た。

さて、新京一中の少年達を、救出して帰ってみると、その親達の一部は、既に南方や朝鮮へ疎開した人達もいて、少年達の身の寄せ先きも世話してやらねはならぬ仕末だった。やはり少年達の救出には、望みがかけられなかったし、また、それを待ちきれないで、新京を去って行った親達があったのであらう。私は、結局途中の死亡者を除き七十名近い人々の救出に成功した訳である。責任をどうにか果して、稍々心のゆるみが出たせいも、帰宅後、小野寺博士の診断でも病

名の判らない風土病的病気にかかって臥床する身となった。

ソ連軍に協力、満州復興の画策

——高碕達之助氏を中心に——

十一月中旬過ぎになると、新京の街は、ソ連軍侵入当初よりは、やや落着きを見せた。民家への徒らな闖入や暴挙を取締るソ連軍の自粛も出来初めた。近くの中央広場には、立派な戦勝記念塔等もソ連兵によつて建設されもした。愈々厳冬の新京の繁華街には、日本人達の屋台店が立ち並らんで、内地では想像もつかぬほどの酷しい寒さの野外で、少しの暖もとりに得ないまま野天の市が、壮観と思わるるばかりに出来あがって行つた。

私の次男の二郎も十三才の子供で、肉や煙草の仕入れをして行商を始めたが、時たま、ソ連兵に商品を強奪されて泣いて帰る日もあつたりした。

私の病気は、はつきりせず、なお床中にあつたが、丁度その頃、高碕達之助氏を中心にして日本人の民間有力者達が、夫々専門の事業分野で、新京かハルピンを中心にして、ソ連軍に協力し戦つて、満州復興の画策が起つた。病中の私にも、是非参画して文化事業面を担当するようにとの、終勧誘が再三再四あつた。私は、将来の満州情勢について、見透しもはつきりせず自信もなかつた

ので、これを拒みつづけた。

逃亡四カ月半、ソ連の逮捕を逃れて

十一月下旬から十二月にかけて、新京在の有力な事業会社の責任者が、つぎつぎとソ連軍に逮捕され、ソ連へ拉致されていくようになった。丁度十二月の中旬近い頃の日、夕食をとっている処へ、三人のソ連兵が銃を肩にして、日本語に通じた一白系露人の案内で、私の玄関を叩いてやって来た。私は「来たな……」と感じたが、次男の二郎が玄関に出て、咽嗟の気転で私の不在を告げた。この隙きに、私は裏口から逃げ出して二階の小野寺博士宅へ逃げこんだ。とりあえず、その夜は小野寺宅に潜んで、その後、転々としての私の逃亡が始った。会社社宅アパートの一室と社員の家の二カ所を隠れ場所にして、新京中の街を、三、四日づつ、転々と移り歩いた。外套の胸には変名の姓名を印し、深くマスクして、所謂地下にもぐる類いである。家内は、その間。パラチブスに侵かされ病床にあったが、万事を小野寺博士に依頼し、家の様子は内密に一部の社員達から連絡してもらったことにした。

その後二、三度ソ連兵がやって来て、家中を隅々まで土足で搜索したらしい。そのうち、隣組

の班長が、私をつき出すようにと、二、三日留置拷問されたりもしたそうだが、私の潜行は、会社従業員家族達の、必死の庇護のお陰で一応成功した。

ソ連軍の新京撤収も間近く、邦人逮捕もようやく、ゆるやかになった気配なので、翌年四月初め、全く四力月半ぶりに、私は密かに自宅に帰った。啓蟄ということがあるが、まさしく、それにも似た格好で、久振りに陽の目を見る思いだった。

ソ連軍撤収と八路軍の侵攻

帰宅してみると、白山住宅の周囲は塹壕が掘られ、鉄条網が幾重にも張りめぐらされて、自宅の如きは、その真只中になって、外部との連絡も困難なほどになっているではないか。それはソ連軍の引揚げがいよいよ迫って来るにつれて、満軍が、八路軍の侵攻に備えての防備であった。近くの首都警察本部が、満軍の守備部隊本部になっていた。附近一帯にはバリケードが設けられた。処もあるうちに、こつした攻防の中心拠点に住まわねばならないとは、これもまた因果と諦めるより仕方がなかった。

終 愈々四月十日過ぎ頃になると、夜な夜なソ連軍の大戦車が轟々と音を立てて動き出し、このバ

リケードを片っぽしから、バリバリと打壊して走るのである。こうして、新京はただならぬ様相を再び呈して来た。ソ連軍は四月十五日の未明を期して、一斉に撤収を開始した。ソ連軍と、作戦上すでに連絡をとっていた八路軍は、それ迄新京の周辺に集結を終って、首都を遠巻きに包囲していたのである。ソ連軍の撤収が始ると同時に、蒋介石軍の旗印をかざす満軍の新京防衛守備隊と、八路軍との戦闘の火蓋が、一斉に切られた。轟々たる砲音が、遠く聞えその戦闘の熾烈さが知られた。

八路軍と満州軍の攻防戦

こうした戦闘は、夜となく昼となく続いて十七日の朝ともなると、八路軍は首都新京の中心部にまで攻めこんで来る様子である。自宅の近くに迫撃砲弾が破裂し、機関銃や、小銃弾が、楊柳の枝をピシッ、ピシッと折り、木の葉がしきりに飛び散る。ビューン、ビューンと小銃弾が空を切る音が耳に入る。

私達の住宅の壁は、厳寒に耐えるために一〇〇糎余もあるほどの分厚な鉄筋で建造されてあったので、小銃や機関銃弾では、そうたやすくは破壊されなかった。それでも、窓には布団や畳を

立てかけ、弾を防いだ。戦が激しくなると私共は一団となって部屋の一角に身を寄せて弾を避けた。それでも布団や畳を抜けてくる弾が頭上をビューン、ビューンと音をして、天井の梁木や柱にピシッ、ピシッとつき刺さりもした。ハリ戸には、小指ほどの小穴が、ぱくりぱくりあいた。

塹壕にいて打合っている満軍の兵達が傷ついて倒れるのが眼前に見える。小野寺宅に同宿している医学生達が、満軍の看護兵に手伝って血みどろな負傷兵を担ぎ上げて、小野寺宅の応接室に収容につとめた。一郎も二郎も兵達の求めで銃弾の下をくぐって、塹壕の中へ、水やお茶を運んでやったりもした。軽い負傷兵には壕内で手当ての手伝いもさせられたりした。

愈々十八日の朝になると、自宅の周囲を、弾雨の中で往来する兵は、敵か味方か何れとも判明しがないような気配を感じた。すると、ソ連兵の来襲の防壁に、厚い鉄板を張りつけた頑丈な裏門の鉄扉、鶴嘴の如きもので、ガンガンと被壊されはじめて来た。弾雨下なので、弾を避けて、伏せたまま二、三人の兵が打ち壊しをはじめている。敵か味方かわからないが、さては困ったことになった。鶴嘴の一撃一撃が私の心臓に打ちこまれるような思いだった。

後 小野寺宅には、赤十字の旗が屋上に掲揚してあったので、この旗下は少々安全と思って、弾雨をくぐって表門から小野寺宅へ家族一同避難した。かくして、角屋敷だった自宅は攻防の拠点と終して、真先に、八路軍に占拠されてしまったのである。

丁度正午近いとおぼしき頃、満軍守備隊本部から火の手が上って、最後の守備拠点から、満軍の総退却が始った。この時、進軍の突撃ラツパに合せて、白山公園一帯から、まったく一斉に、蟻穴を打破した如く、八路軍の大部隊が、縦横の鉄条網を、破壊しての大突撃がはじまった。

こうした情景を目の前に見た私達は、既に幾度かの苦難に、心が凍りきっていたせいか、また、日本軍の敗退を見る訳でもなかったので、何となく他人事のように、さして恐怖が身に沁むほどのことはなかった。だが、満軍の負傷兵を、応接室に一杯收容していることを、八路軍が知ったら、どうなることかと不安が先きにたった。

午後二時だったと思うが、一帯に休戦ラツパが鳴り響いた。暫時すると、白山住宅に八路軍がどやどやと侵入して来た。先づ、軍への給食の用意をしるとの命令が出た。別に我々日本人に対して、危害を加えたり、暴行をなす様子は少しも感じられなかった。困ったのは、收容している満軍の負傷兵達のことだったが、八路軍の隊長らしき者に、事情を打明けて、收容室の扉を開けて見せると、予期に反して、その隊長は、むしろ感謝の意を述べ、負傷兵達には煙草を与えて、八路軍への帰順を物静かに諄々と説くのであった。大きい難関を越えたようでもっとした。

八路軍政下の新京

私の自宅がどうなっていることや、許を得て帰って見ると占拠されただけに、手もつけ難いほど土足に荒らされていた。それ以後八路軍は約十日間ばかり、私の家を占拠し、私の家族は、応接室の洋間一室に幽閉されて、他の居室は、彼等の土足のままの起居室となった。だが少しの不安らしい気持をもたせることもなく、むしろ難民としての同情的態度にもひとしいものがあった。

新京に侵入して来た八路軍は、正規軍らしく、軍律も厳で、さして粗暴さもない若々しい青年達だった。隊長らしき者も兵達と階級をわかたぬ生活に終始し、朝四時頃ともなると皆な起床して、訓練に出かけて行った。言葉の通じない彼等と筆談を始めた先づ最初の質問は、延安にいた野坂参三を知っているかということだった。

後
新京の街は、八路軍のスローガンで、目抜き街の街角は張りめぐらされ、朱徳や毛沢東の大きい肖像が飾られ、トラック上から、メガホンで市民へ八路軍への帰順を、しきりと宣伝して廻った。一週間もたつと八路軍発刊の新聞が出されはじめた。

八路の軍隊は十日ばかりして後、私達の白山住宅から、何処かへ静かに引揚げて行ったが、首都新京の市政は、完全に八路軍下に移った。難民的日本人達には、むしろ安堵を与えてくれた。それに反し、満人街方面の有力な満人店舗は相当荒らされて、恐慌を来たしているようであった。八路兵は至極く素朴で、何か理想に向って進んでいるかのように嬉々としていた。ここに今日の中共が力強く芽生えていたのだ。

八路軍の治政下で、一時新京は落ち着きを見せた。その中、さきにソ連軍に協力して満州復興の劃策をした高碇達之助氏を中心とする人々が母体となって、今度は八路軍に協力して、ハルピン地区で企業再興を計る画策が再び起ってきた。私は、その計画に参加する勧誘を、またまた、しきりと受けた。もともと私の事業は、アメリカのRCAとの提携が発端でもあり、八路軍との協力にはどうしても気が進まなかった。しかし、その計画は愈々熟して、相当人数の有力者達が、近くハルピンへ出発する段取りにまで運んだ。そして出発の日取りも決定していたようであった。

私には、会社従業員の家族達を、無事に日本へ引揚げさせねはならぬ責任が、先づ第一でもあったので、この計画の一行とは、遂に袂を別つことにした。

八路軍の総退却と蒋介石軍の入城

その一行のハルピンへの出発予定日より、四、五日早く今度は蒋介石軍の正規軍が新京へ侵入して来た。そして、八路軍の一斉総退却となった。文字通り走馬灯のごとき、めまぐるしい変転である。八路の退却は、退潮のごとく、全く無抵抗にもひとしい、鮮やかな撤退であった。

先づ最初に入城して来た蒋介石軍の先兵は、堂々たる軍馬に跨った騎馬隊であったが、軍馬は日本軍のかつての愛馬であったものらしく立派だった。が、その乗馬姿は見るからに、なっていなかつた。その軍馬を見て、私達は胸迫るものを感じた。

その後、続々と軍が入城したが、何れも米軍支給のショートパンツに軍靴をはき、片言まじりに英語も使つたりした。その発音が、よく判らないで聞き返したりすると、英字のスペルを云つて私達の無字を詰めるかのように、威張るのである。それは、米軍によって彼等が、訓練を受けた時の要領を、真似るかのようにも受けとれた。兎に角私達は敗戦者である。少しの文句も云えないで従順にした。

終　　その中、彼等は日本の婦女子を帯同して、ダンスホールや、酒場を歩き廻ることを得意とした

後りもした。軍律はゆるみ、市内の秩序も乱れがちになり、むしろ満人達が抬頭して来て、日本人達を不安に追込んで来た。

終戦　そして、白山住宅も、軍の命によって即時立退きを命令される気配が強くなったので、私の家族は、着のみ着のまま、白山住宅を出て、会社のアパート寮の狭い一室に引移ることにした。

内地引揚

内地への引揚

会社有為の人材が、北満の戦場で立派な最後をとげた知らせが、その戦友達から届いたりした。また、遠く沖繩の戦場で散った人々もあつた。八木沢、安川両君初めとして、ソ連へ捕虜として輸送された人々も多かつた。

こうして、祖国のために戦死した人々や、ソ連で悲惨な捕虜生活をする人々の家族を、無傷に、立派に内地へ送り届けることが、私に負わされた何より大事な仕事である。後日、私の仕打ちが、少しでも指弾されることがあつてはすまぬと思い、最善の注意と配慮につとめた。無事に戦線から帰りおおせた人々の家族は、出来るだけ自主自営にまかせ、婦女子だけの家族には万全の注意を払つて、その生活を世話しつつ、間違いのないようにつとめた。お陰で、引揚時迄、誰一人として不仕末もなく、全く事無きを得たことは此の上もない仕合せであつた。戦死やソ連に抑留された人々は、私の力ではどうにもならないことだつた。

愈々九月初め、引揚の日が来て、私達会社関係の家族達は一団となつて、無蓋車の貨車に揺られ、奉天を経てコロ島から、ようやくにして引揚船上の人となり得た。

乗船間際の空腹を満たすために、無蓋車に雨をしのいだ一本のコモリ傘を、子供達が、焼芋の二、三個と交換して来て、皆で舌鼓を打ったことが記憶に新らしい。

長男一郎の死

長男一郎は、強度な栄養失調が嵩じて、日本へ引揚後、入院約一力年間に亘る長い闘病の末、遂に長逝した。この一郎の死に際し、私が復帰して再びその重職にあった日本ビクターでは、社を挙げて同情をしてくれて、終戦後間もない不自由な時にも拘らず、社葬にもひとしいまことに79立派な葬儀が出来たことを、今でも私は感謝している。一郎の死の翌年一月の法事に当って、日本ビクター従業員一同へ私が書き送った挨拶状をここに附記して、悲しい憶出を閉じたい。

『息一郎の一年余りに亘る長患い、さらにその死去にあたり、皆様から賜りました御同情に対し、深く御礼を申し上げます。』

内地引揚
まだ、ビクターの会社が横浜の中村町にあった頃、私は根岸の海浜に住んでいました。昭和五年の夏、そこで生れたのが一郎です。会社が現在の場所に移ってから、私も極く近くの新子安台に居を移しました。近いという便利さから、拙宅が社員の方々の寄合場所になりがちであ

ったので、一郎もその仲間入りをしては、皆なにあやして貰ったりなぞして幸福な赤ん坊でした。国民学校へ初めて上ったのは、大阪郊外の千里山に居た頃で、そこは紫外線が豊かだし、アカシヤの林中にある高燥な高台でもあったので、一郎は太陽の子のごとく、極めて頑健に、明るく伸びて行きました。秋の候にもなれば、大阪支店の人々が私の家に集い、アカシヤの枯枝をへし折って来ては、庭先で焚火し、はては、その焚火の周りにいつの間にか音頭踊りの賑やかな輪を作ったりしたものでした。こうした時、一郎もその囃し方の一人になったものです。沖縄戦線で戦死した好漢飯野君が、いつも見事な音頭を取り、下駄ばきで大地を鳴らしながら、品よく踊ったことも、また今にしては胸の痛む追憶であります。

昭和十六年の暮、急に満州に行くことになって、一郎も小さい胸をときめかして、未知の大陸に幼い希望をかけたことと思います。私も一郎、二郎の二人の子供に大陸を知らして置くことはよい事だし、殊に箱庭のごとく美しい風光と人情ばかりの祖国を離れて、頭骨も凍る程の寒さと闘い、血の異った五つの民族が競合している粗野にして、酷しい人情の中で男の子が成長してまいることに興味を持ったのであります。

茫茫漠々とした大沃野、悠遠なる大河、あの大陸の自然が、私をかつて育て上げた狭い日本の山河より、遙かに偉大なものを、二人の子供に与えて呉れるであろうことも、また一つの期待

でありました。

今にしては全くの夢でしかないのですが、北満の大興安嶺、ホロンバイルの大曠野、黒竜、松花の大江、また雲湧く長城、さては王城の都北京の美しさを学ばしてやりたかったのです。しかし、こうしたことも大戦がきびしさをますにつれて出来なくなり、一郎には学徒としての激しい訓練の日のみが続くようになりました。

丁度終戦前の五月、身体の丈夫な少年達のみが選ばれて、ソ満国境の奉公勤労隊に投ずることとなり、祖国に対して、いささかの御奉公が出来る誇りを感じながら出掛けて行った僅かに十五才の一郎は、まだ余りに若年でもあったので、痛々しい気もしましたものの、強く育たねばならない男の子の責務として、はげまして旅立たせたのです。身に余るほどの大きなリュックを背負って愉快に出かけて行きました。

揚 引 地 内
終戦直前、ソ満国境は、ソ連軍の激しい攻撃に遇い、一郎達の少年学徒隊の生死は不明となりましたが、初めて十月なかばに国境から少しく南下した東京城に、ソ連軍に收容され、しかも猛烈な栄養失調で重態であることの情報を得ました。是非救い出さねばと念った私は、軍事探偵の冒険行もどきで、ハルピンから牡丹江、さらに寧安、東京城へとソ連軍の占領地を、逆に潜入して行き瀕死の一郎を新京へ救出することに成功したのでした。爾来一郎には闘病の日々が

続き、すべてを消耗しつくしていた身は、遂に腎臓、膀胱の余病を併発してしまい、高熱と疼痛に悩みつづけました。日本に引揚げて来てからは、気分の転換と、多少の栄養によって幾分病状好転したかに見受けられましたが、それも僅かに一カ月かそこいらの間に過ぎず、一昨年十一月愈々腎臓摘出の手術を受けることになりました。手術した後、入院が余りに長引くので、しまいには、一家全員が病院へ引移って、病室を住いとするという訳で、賑やかな病院生活でした。

しかし一郎の病状は、もともと栄養失調の体力に無理があつて、二回、三回と手術を重ねるにつれ、却って衰えが見えて来るばかり、快方への光明が、土壤の崩れ落ちて行くような淋しさに82変つて行く日々であつたのです。そして遂に昨年十一月二十八日十七才にして永眠しました。平凡ではありましたが、責任感の強い正直さのある子供であつたので、何か社会の御役に立つ将来もあるならんと私も思い、また本人も幼いながら、希望を持っていたようでしたが一運命というものは厳粛なものであります。

彼の病中、また死去の際、皆様の賜りました御同情に対し、御返礼申上るしるしの一端に替え、洵に些少ではありますが、会社診療所の医療機購入資金の一助として、僅かばかりの金子を寄附さして頂きました。御諒承願えれば幸甚であります。

昭和二十三年一月

亡息一郎の法事に当り

野邊游吉

ㄣ

昭和四十年五月

身辺雑記

――満州の終戦前後――

野邊游吉

鎌倉市二階堂八五番地

乱丁、落丁はお取替えいたしません。
素人製本によりばらばらになる恐れが
ありますので丁寧扱って下さい。